鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(49)

奄美地区埋蔵文化財
分布調査報告書Ⅰ

昭和62年度

1989年3月

鹿児島県教育委員会

序　　文

奄美大島地区の埋蔵文化財については，これまでも昭和30年の九学会連合奄美大島共同調査委員会による遺跡分布調査等各種調査が行われてきていますが，現在，同地区においては，奄美群島振興開発計画に基づき交通基盤整備事業や農業基盤整備事業等諸開発事業が急速に進められており，埋蔵文化財の保存と開発事業との調整を図るうえで，より詳細な埋蔵文化財の分布状況の把握が必要となってきている。

このため，鹿児島県教育委員会では，昭和62年度から４年計画で奄美地区全域の埋蔵文化財調査を行うこととし，初年度は犬田布貝塚，面縄貝塚等重要な遺跡の所在する徳之島地区について実施したところである。

本書は，この分布調査の結果をとりまとめたものであり，この地域の文化財保護のために各般にわたって活用していただければ幸いである。

終わりに，この調査に御協力をいただいた関係町教育委員会並びに関係者に深く感謝するところである。

平成元年３月

鹿児島県教育委員会

教育長　濱　里　忠　宣

例　言

1　本報告書は，昭和62年度に実施した奄美地区埋蔵文化財分布調査の報告書である。

2　本年度は徳之島を調査対象地区とし，一部試掘調査も実施した。

3　本書で用いた遺跡の番号は，昭和59年度に作成した「鹿児島県市町村別遺跡地名表」に準拠し，新たに確認された遺跡の番号は以前より確認されている遺跡の番号に続けて付けたものである。

4　本書に用いた遺物番号は，通し番号を付し，挿図・図版の番号と一致する。

5　本書に用いたレベル数値は，全て海抜絶対高である。

6　遺構・遺物の実測，製図，写真撮影は中村・東が分担して行った。また，天城町内の遺物の一部については，熊本大学考古学研究室の許可を得て，熊本大学考古学研究室報告19「玉城遺跡」の中より転載した。

7　石器の石材鑑定は，文化課の旭慶男が行った。

8　本書の執筆分担はつぎのとおりであり，編集は中村・東が行った。

第Ⅰ章 …… 東
第Ⅱ章 …… 東
第Ⅲ章 …… 中村
第Ⅳ章 …… 東

本 文 目 次

序　　文
例　　言
第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 2
第Ⅱ章　徳之島の位置及び環境
　第１節　徳之島の位置及び環境 …… 3
　第２節　これまでの研究 …… 4
第Ⅲ章　各町管内の遺跡
　第１節　徳之島町管内の遺跡 …… 7
　第２節　天城町管内の遺跡 …… 10
　第３節　伊仙町管内の遺跡 …… 15
第Ⅳ章　ナーデン当遺跡の確認調査
　第１節　調査の経過 …… 20
　第２節　遺跡の位置及び環境 …… 20
　第３節　調査の概要 …… 21
　第４節　層　　位 …… 21
　第５節　第１トレンチ …… 22
　第６節　第２トレンチ …… 22
　第７節　第３トレンチ …… 23
　第８節　第４トレンチ …… 23
　第９節　遺　　物
　　１　土　　器 …… 24
　　２　石　　器 …… 28
　第10節　ま と め …… 31

表　目　次

第１表　徳之島町遺跡地名表 …… 9
第２表　天城町遺跡地名表 …… 15
第３表　伊仙町遺跡地名表 …… 18
第４表　土器観察表 …… 24
第５表　石器観察表 …… 31

図　版　目　次

図版１　分布調査（トビヤ遺跡・カンジャエ鍛冶跡・平土野原遺跡
オガミヤマ遺跡・秋利神線刻岩・アマングスク） …… 32
図版２　徳之島町・天城町・伊仙町内の遺物 …… 33
図版３　ナーデン当遺跡調査状況 …… 34
図版４　ナーデン当遺跡出土遺物（土器１） …… 35
図版５　ナーデン当遺跡出土遺物（土器２） …… 36
図版６　ナーデン当遺跡出土遺物（石器） …… 37

挿　図　目　次

第１図　徳之島（徳之島町・天城町・伊仙町）の遺跡地図 …… 付図
第２図　徳之島の位置図 …… 3
第３図　神之嶺アナダ遺跡採集遺物 …… 7
第４図　山田遺跡採集遺物 …… 7
第５図　トビヤ遺跡採集遺物 …… 8
第６図　馬塔遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 10
第７図　戸ノ木遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 11
第８図　大久保遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 11
第９図　平土野原遺跡採集遺物 …… 11
第10図　塔原遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 12
第11図　鍋窪遺跡採集遺物 …… 13
第12図　鍋窪遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 13
第13図　千間遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 13
第14図　千間遺跡採集遺物（熊本大学報告より） …… 14
第15図　長竿遺跡採集遺物 …… 14
第16図　本川遺跡採集遺物 …… 16
第17図　本川遺跡採集遺物 …… 16
第18図　ミンツキ集落跡採集遺物 …… 17
第19図　ヤナギダ古窯址採集遺物 …… 17
第20図　中山神社遺跡採集遺物 …… 17
第21図　ナーデン当遺跡周辺の地形図 …… 20
第22図　トレンチ配置図 …… 21
第23図　基準層位 …… 21
第24図　第１トレンチ実測図 …… 22
第25図　第１トレンチ遺構実測図 …… 22
第26図　第２トレンチ実測図 …… 22
第27図　第３トレンチ実測図 …… 23
第28図　第４トレンチ実測図 …… 23
第29図　土器実測図(1) …… 26
第30図　土器実測図(2) …… 27
第31図　土器実測図(3) …… 28
第32図　石器実測図(1) …… 29
第33図　石器実測図(2) …… 30

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は，奄美群島振興開発地域について，開発計画の施行前に埋蔵文化財の精密な分布調査を実施し，埋蔵文化財保護と開発事業との調整のための資料を得ることを目的として，昭和62年度から平成2年度までの予定で，奄美地区1市13町村の埋蔵文化財分布調査を計画した。

調査にあたっては，文化庁全国遺跡分布調査要項（庁保記94号　昭和46年4月22日）に準拠し，埋蔵文化財を中心に悉皆調査を行い，必要に応じて試掘調査を実施した。

昭和62年度は，大規模な国営畑かん事業が計画されている徳之島地区を対象にして，昭和63年2月22日から同年3月10日まで分布調査を実施した。

第2節　調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濱里　忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井　浩一
調査企画担当者	〃	課長補佐	川畑　栄造(昭和62年度)
	〃	課長補佐	奥園　義則(昭和63年度)
	〃	主幹	森田　齊(昭和62年度)
	〃	主幹	立園多賀生(昭和63年度)
	〃	主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長	立園多賀生(昭和62年度)
	〃	文化財研究員兼埋蔵文化財係長	吉元　正幸(昭和63年度)
調査担当者	〃	主査	中村　耕治
	〃	主事	東　和幸
調査事務担当者	〃	企画助成係長	浜松　嚴(昭和62年度)
	〃	企画助成係長	京田　秀允(昭和63年度)
	〃	主査	京田　秀允(昭和62年度)
	〃	主査	平山　章(昭和63年度)
	〃	主事	川畑由紀子(昭和62年度)
	〃	主事	末永　郁代(昭和63年度)

なお，調査にあたっては，徳之島町，天城町，伊仙町の各教育委員会及び九州農政局徳之島開拓建設事業所，鹿児島県大島支庁徳之島土地改良出張所の協力を得た。また，伊仙町文化財保護審議会委員　義憲和氏，徳之島町文化財保護審議会委員　徳富重成氏，同　町田進氏，伊仙町　四本延宏氏の協力を得た。

第３節　調査の経過

調査の経過は，日誌抄により以下述べる。

2月22日(月)	晴	九州農政局徳之島開拓建設事業所にて調査概要の説明とその打ち合せ。天城町教育委員会にて打ち合せ。
2月23日(火)	曇雨	徳之島町教育委員会にて打ち合せ。徳之島町神之嶺地区の調査。伊仙町教育委員会にて打ち合せ。
2月24日(水)	曇	天城町全域の調査。
2月25日(木)	曇雨晴	国営徳之島土地改良事業区域内の調査。井之川地区，母間第二地区，母間地区，花徳地区，手々地区，松原地区，西阿木名地区の調査。
2月26日(金)	晴	亀津地区，手々地区，松原地区の調査。
2月27日(土)	雨	徳之島町神之嶺地区の調査。伊仙町全域の調査。
2月28日(日)	雨	徳之島町井之川地区，手々地区の調査。
2月29日(月)	雨	ナーデン当遺跡の発掘調査開始。第１トレンチの発掘。
3月1日(火)	雨	第１トレンチのピット群の検出。第２トレンチ，第３トレンチの発掘。
3月2日(水)	雨	第４トレンチの発掘，トレンチ周辺の平板実測。午後から遺物の水洗い。
3月3日(木)	雨	トレンチ周辺の平板実測。第４トレンチⅡ層の掘り下げ。午後から遺物の水洗い。
3月7日(月)	曇	鹿児島県大島支庁徳之島土地改良出張所にて調査概要の説明とその打ち合せ。第二天城南部地区，天城北部地区の調査。
3月8日(火)	晴	第４トレンチの完掘。各トレンチの平面及び断面の実測。埋め戻し作業。
3月9日(水)	曇	発掘用具返却。遺物の輸送。伊仙町馬根地区，喜念地区の調査。
3月10日(木)	晴	九州農政局徳之島開拓建設事業所へ事業区域内遺物散布地の分布状況について説明。

第 Ⅱ 章　　徳之島の位置及び環境

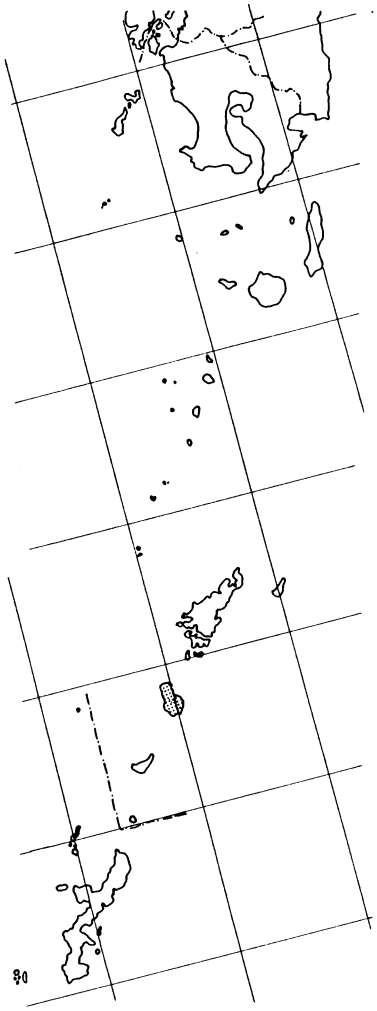
第１節　徳之島の位置及び環境

南西諸島は，北は種子島から南は南台湾まで，およそ1300kmの海上に花綵状に100あまりの島々が続いている。徳之島は，この南西諸島の中央やや北よりにあり，北緯27度40分から27度53分，東経128度53分から129度３分の間に位置する。距離は，鹿児島の南南西468kmにあり，奄美大島から139km，沖永良部島から65km，沖縄から200kmの距離にある。島の大きさは南北約26km，南西の幅は南半で約15km，周囲84.1km，面積248.11㎡のやや北方へせまくなっている島である。

徳之島の地形は，標高200ｍ付近を境として，山地と段丘発達地に大別される。山岳としては，北から南へ天城岳(533ｍ)，三方通岳(496ｍ)，美名田山(437.7ｍ)，井之川岳（664.8ｍ），丹髪山（433ｍ），剝岳（382.3ｍ），犬田布岳（417.4ｍ）を主峰とするが，特に井之川岳を主峰とする山脈が中央を南北に走り島を両断している。

この中央の山地を取り巻くように，海岸に向かって緩やかに傾斜した段丘が広がり，島の東南から南部西南にかけて隆起珊瑚礁が発達し，広大な海岸段丘を形成している。隆起珊瑚礁より生成が古いので，琉球石灰岩と呼ばれ，厚いところでは100メートルを越えていると言われている。この琉球石灰岩の表面は国東礫層と呼ばれるうすい砂礫や粘土に覆われている。海岸線は天城町の南部から伊仙町にかけて，島の西岸がほとんど20ｍから100ｍほどの断崖で海に落ち込んでいるのに対し，島の東岸はほとんど全面になだらかな隆起珊瑚が発達している。

気候は亜熱帯性の海洋気候で，年間を通じ平均気温は15～29度と温暖であるが，冬には季節風が強い。降水量は，年間2000mm程度であるが，山間部では平地と比べて多少多い。また，まれには干ばつがあり，長期に及ぶ場合は農作物に被害を及ぼすこともある。台風銀座と言われるように，台風があると南西諸島は，その転向線に並んでいるので，家屋や農作物に大きな災害をもたらすことが多い。



第２図　徳之島の位置図

（注）各町誌より抜粋

第2節　これまでの研究

「日本人はどこから来たか」という誰しもが興味を抱く問題を考える場合，通過地点をさかのぼることによって，日本人の源流にたどり着くのが最も端的な方法であると言われている。南西諸島の一つである徳之島は，九州・本州とユーラシア大陸との「架け橋」として位置づけられ，いち早く中央の考古学会から注目されるに至った。昭和3年，面縄貝塚が発見されると，中央の考古学者が次々に来島し，本格的な発掘調査が行われ，その成果は学会誌にも発表された。伊仙町喜念にある喜念原始墓もその一つである。南島の先史時代を語る場合，徳之島は避けてとおることができない重要な地点である。

考古学では，文字として残されていない時代の年代や文化のまとまり等を，最初に発見された遺跡の名前を付した土器型式名で表すのが慣習となっている。このような標式遺跡となっている遺跡が徳之島には多くある。弥生時代前期に位置づけられる喜念式土器は喜念貝塚によるものであり，開元通宝を伴う例が増えている兼久式土器は，面縄第3貝塚で初めて明らかになったものである。また，永年発掘調査が行われている面縄第4貝塚は，面縄東洞式・面縄西洞式・面縄前庭式などの土器型式の標式遺跡となっている。

全国遺跡分布調査により，きわめて重要な遺跡として位置づけられた遺跡について文化庁の補助を得て実施される重要遺跡確認調査が，伊仙町では3箇所の遺跡について行われている。このことは，徳之島に所在する遺跡は日本の文化を解明する上で，極めて重要な情報を提供する遺跡であると位置づけられたことにほかならないのである。面縄貝塚，犬田布貝塚，ヨヲキ洞穴のいずれも多くの貴重な資料が得られ，新たな成果が報告されている。

しかし，数々の発掘調査にもかかわらず，全国に影響を及ぼすほど南島の考古学研究が進んでいないのは，地層が薄く層序関係が捉えにくいため，遺物の新旧関係を確定することが極めて難しいことによるものと考えられる。南西諸島に一般的に流布している須恵器に類似した土器についても，永い間，その位置づけや内容が不明であったが，昭和59年カムィヤキ窯跡群が調査されたことにより，用途によって異なる器種の構成が明らかとなった。出土遺物については，熱残留磁気測定と放射性炭素測定の科学的方法による調査結果から，つくられた年代が明らかにされ，南島全体の遺跡やグスクの研究に大きく寄与することとなった。この重要な遺跡の発見のきっかけをつくったのは地元の熱心な研究者達であった。

開発に伴う発掘調査が多い中で，熊本大学文学部考古学研究室は2回にわたって天城町内の遺跡の学術調査をしている。昭和60年に調査された玉城遺跡では，遺構は民俗学のほうから，遺物は地学と製錬工学のほうからと，多分野の総合的な研究がなされており，本年度実施された塔原遺跡の発掘調査の成果についても大いに期待されているところである。

徳之島には埋蔵文化財のほかに，地上に残っている文化遺産も多くある。近年までなされていた風葬墓の風習は，古くは喜念原始墓にみられるように弥生時代までその起源をさかのぼることができ，形質人類学や共同体の研究などにとっては貴重な資料である。また，線刻画や聖域，鍛冶跡など，民俗誌的な場所についても今後目を向けていく必要があろう。

文　献

(1) 山崎五十磨　「鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就いて」『考古学雑誌』第20巻10号 1930。

(2) 小原　一夫　「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」『史前学雑誌』第4巻3・4号　1932

(3) 大山　柏・小原　一夫　「奄美群島徳之島貝塚出土遺物」『史前学雑誌』第5巻第5号 1933

(4) 三宅　宋税　「南島の石器時代に就いて」『ドルメン』第4巻6号　1935

(5) 三宅　宋悦・藤岡謙次郎　「徳之島出土の貝塚土器に就いて」『考古学』第11巻第5号 1940

(6) 三宅　宋悦　「南島の先史時代」『人類学先史学講座』第16巻　1940

(7) 三宅　宋悦　「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び人骨の抜歯に就いて」『考古学雑誌』第33巻第10号　1943

(8) 河口　貞徳　「南島先史時代」『南方産業科学研究所報告』第1巻第2号　1956

(9) 河口　貞徳・国分　直一・野口　義磨・原口　正三　「徳之島の先史遺跡調査報告」『人類科学』第10集　1958

(10) 河口　貞徳　「鹿児島県大島郡兼久貝塚」『日本考古学年報』7　1958

(11) 国分　直一　「鹿児島県大島郡面縄第二貝塚」『日本考古学年報』7　1958

(12) 河口　貞徳　「奄美の先史諸遺跡」『人類科学』第11集　1959

(13) 三友国五郎・国分　直一　「徳之島面縄貝塚調査報告　面縄第2貝塚と付近の貝塚」『古代学』第8巻2号　1959

(14)「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』1959　九学会連合

(15) 三友国五郎・国分　直一　「鹿児島県大島郡徳之島面縄第二貝塚，およびその付近の遺跡調査概報」『日本考古学年報』8　1959

(16) 河口　貞徳　「南島先史時代の文化交流」『アジア文化』第11巻第3号

(17) 河口　貞徳　「南島先史時代」『南島文化』第2号

(18) 国分　直一　「南島先史時代の技術と文化」『東京教育大学文学部史学研究』第66号 1966　東京教育大学文学部

(19) 白木原和美　「徳之島の先史学的所見」『南日本文化』第3号　1970　鹿児島短期大学付属南日本文化研究所

(20) 国分　直一　「南島先史時代の研究」『考古民俗叢書』10　1972

(21) 河口　貞徳　「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号　1974　鹿児島県考古学会

(22) 白木原和美・義　憲和　「大島郡伊仙町の先史学的所見」『南日本文化』第9号　1976 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所

(23) 義　憲和　「伊仙町の歴史」『伊仙町誌』1978　伊仙町

(24) 牛ノ濱　修・堂込　秀人・植之原道義・西中川　駿・松下　孝幸　『面縄第１・第２貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　1983．3　伊仙町教育委員会
(25) 吉永　正史・宮田　栄二・戸崎　勝洋・植之原道義・西中川　駿　『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　1984．3　伊仙町教育委員会
(26) 義　　憲和・四本　延宏　「亀焼古窯跡」『鹿児島考古』第18号　1984．6　鹿児島県考古学会
(27) 上村　俊雄　「徳之島の先史時代」『南日本文化』第17号　1985．3　鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
(28) 義　　憲和　「徳之島のグスク」『特別展―グスク―』1985　沖縄県立博物館
(29) 新東　晃一・青崎　和憲・時枝　克安・伊藤　晴明・三辻　利一　『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　1985．3　伊仙町教育委員会
(30) 吉永　正史・牛ノ濱　修・堂込　秀人・植之原道義・西中川　駿・松下　孝幸　『面縄貝塚群』　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)　1985．3　伊仙町教育委員会
(31) 新東　晃一・青崎　和憲・中村　耕治・井ノ上秀文　『カムイヤキ古窯跡群Ⅱ』　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　1985．3　伊仙町教育委員会
(32) 白木原和美・坂井　義哉・廣松　秀子・友口　恵子・保永　朋史・木島　慎治・小山　智宣・馬原　和広・吉岡　武美・平　　俊隆・斎藤　康子・松本　玲子　『玉城遺跡　付周辺遺跡分布調査』研究室活動報告19　1986．3　熊本大学文学部考古学研究室
(33) 牛ノ濱　修・井ノ上秀文・松本　光春　『ヨヲキ洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)　1986．3　伊仙町教育委員会
(34) 立神　次郎・長野　真一　『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)　1988．3　伊仙町教育委員会

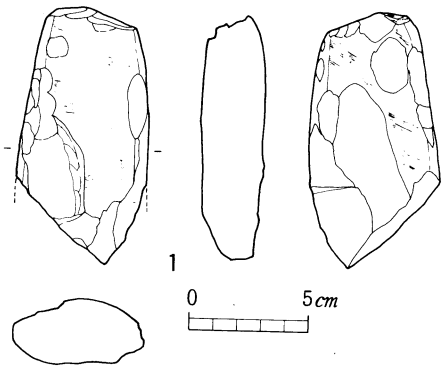
第 Ⅲ 章　各町管内の遺跡

第１節　徳之島町管内の遺跡

徳之島町においては，これまでに19箇所の遺跡が知られていた。その中でもナーデン当遺跡・神之嶺アナダ（シキマント）遺跡は近年確認された重要な遺跡である。今回の調査は，国営の徳之島開拓建設事業予定地区を重点的に行い，あわせて徳之島町文化財保護審議会委員の町田進氏より御教示をいただいた遺跡の調査も行った。その結果，新たに13箇所の遺跡が確認された。また，内陸部にある数少ない遺跡であるナーデン当遺跡の確認調査も実施した。以下，新たに確認された遺跡の概要について述べる。

神之嶺アナダ遺跡（神之嶺アナダ）(91－７)

神之嶺アナダ遺跡は，太平洋に面する標高約20mの台地上にある広範囲に及ぶ遺跡である。遺跡のうちで水路工事の最中に住居跡と思われる落ち込みが確認され，その部分はシキマント遺跡とよばれている。１は今回の調査で採集した磨製石斧で刃部を欠損しているものである。



第３図　神之嶺アナダ遺跡採集遺物

神田１遺跡（手々神田）(91—17)

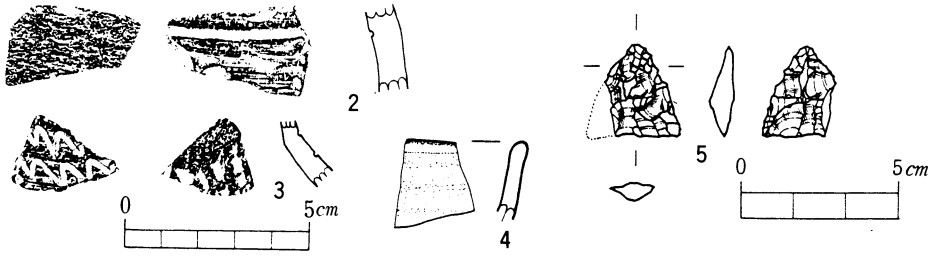
手々集落の南側の標高約30m の台地上にある遺跡で，土器片・黒耀石片が採集された。この遺跡から採集された黒耀石は，西北九州産のものと考えられる。

神田２遺跡（手々神田）(91—18)

神田１遺跡よりやや南に位置する遺跡で，土器の小片が採集された。

山田遺跡（手々山田）(91—19)

神田１・２遺跡よりさらに南側の標高約30m の台地上にあり，東西に川がながれている。土器片・青磁片・カムィヤキ産と思われる陶質土器片・チャート片・石鏃等が採集された。２・３はカムィヤキ産と思われる陶質土器である。３は外面にヘラ描き波状文，内面に格子目叩き



第４図　山田遺跡採集遺物

が施されている。4は青磁である。5はチャート製の石鏃で一部を欠損しているものである。徳之島においては，天城町塔原遺跡についで2例目の石鏃である。

大配田遺跡（手々大配田）(91—20)

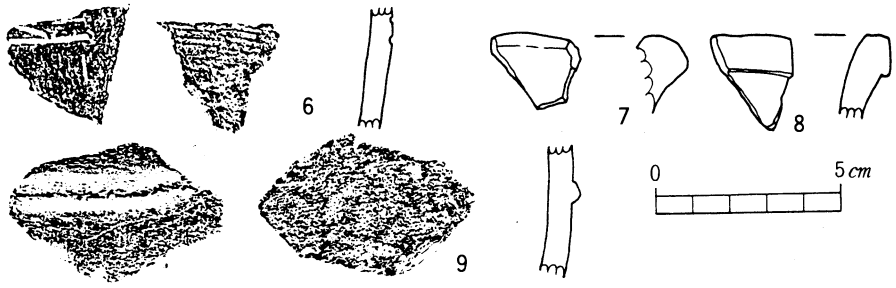
手々集落の西方の標高約10mの台地上に位置する遺跡で，土器片・青磁片・チャート片等が採集された。

カンゲザク遺跡（手々カンゲザク）(91—21)

大配田遺跡の南方の標高約50mの台地上にあり，やや厚手の土器片が採集された。

トビヤ遺跡（金見トビヤ）(91—22)

金見崎の南方の太平洋に面した砂丘上に位置する遺跡で，町田進氏により発見された遺跡である。7と8はやや肥厚する口縁部である。6は細目の沈線文が施され，内面には条痕が認められるものである。9は胴部に突帯を巡らされたものである。



第5図　トビヤ遺跡採集遺物

ハンタ遺跡（花徳ハンタ）(91—23)

上花徳集落と花徳集落の中間に位置する標高約50mの台地上にある遺跡で，町田進氏により発見されたものである。

田志喜志遺跡（母間田志喜志・西田志喜志）(91—24)

麦田川の南に位置する標高約60mの台地上にあり，青磁・染付等が採集された。

トビラ遺跡（井之川トビラ）(91—27)

井之川集落の南方にあり，太平洋に面した砂丘上に位置する遺跡で土器の小片が採集された。町田進氏により発見された遺跡である。

カンジャエ鍛冶跡（亀徳カンジャエ）(91—28)

亀徳小学校の東側で亀徳川の河口に近い岩陰にある鍛冶跡で，現在でも石製の鞴羽口が残っている。カンジャエとは徳之島の言葉で鍛冶という意味である。

第1表　徳之島町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
91－1	本川遺跡	亀津本川7041	台地	縄文	石器・土器	土地所有者　岩城藤武
2	奥名川遺跡	奥名川白貞6283	平地	縄文	石器・土器	土地所有者　下　久志 林　峯山
3	亀津南貝塚	亀津塔原4597	台地	縄文	石器(石斧7個)	亀津小学校保存 発見者　松山作美
4	美代願山	亀津3357	丘陵	縄文	石器	亀津小学校保存 発見者　仲タルカネ
5	坂元貝塚	亀徳2087	平地	縄文	石器	亀津小学校保存 発見者　坂元虎雄
6	ナーデン当遺跡	諸田中代 ナギタ207 〃　165－11 〃　165－24 〃　165－98	標高 180 m 山中	縄文	石器(石サジ・石斧) 無文土器 土器(土笛)	発見者及び保存者　町田進 土地所有者　宮上博良
7	神之領アナダ遺跡	神之嶺アナダ146 神之嶺アナダ150 神之嶺アナダ151	台地 台地 台地	縄文 縄文 縄文	無文土器破片 〃　石斧 〃　石斧	土地所有者　為　光秀 保存者　前田長英 土地所有者　恵　茂良 土地所有者　村田元良
8	大当遺跡	母間反川8040	平地	縄文	石器(石斧)	保存者　大川久男
9	グスィクバテ遺跡	上花徳1740	台地	縄文	石器・土器破片	部落の上方 土地所有者　広沢宮武
10	畦遺跡	畦1434－63	台地	縄文	石器・土器破片	土地所有者　林　豊重
11	手々遺跡	手々3203	平地	縄文	石器・土器破片	土地所有者　榊原繁応 手々小学校保存
12	夜兼久貝塚	亀徳夜兼久	砂浜		土器片	
13	宮城山	花徳宮城	丘陵	歴史		
14	神之嶺城跡	神之嶺アギマス	丘陵	歴史		別称　カンニャウシシギャグ スク・ウシシギャデラ
15	殿地跡	亀徳里	丘陵 平地	歴史		別称　秋津神社 佐安元屋敷
16	ヤト城跡	手々	丘陵 平地	歴史		別称　掟大八目
17	神田1	手々神田	台地	縄文	黒曜石・土器片	昭和62年度分布調査
18	神田2	手々神田	台地		石鏃・土器片	昭和62年度分布調査
19	山田	手々山田	台地	縄文	石鏃・土器片	昭和62年度分布調査
20	大配田	手々大配田	台地		土器片・青磁	昭和62年度分布調査
21	カンゲザク	手々カンゲザク	砂丘		土器片	昭和62年度分布調査
22	トビヤ	金見トビヤ	砂丘	縄文	土器・石器	昭和62年度分布調査 町田進氏情報提供
23	ハンタ	花徳ハンタ	台地		土器片	昭和62年度分布調査 町田進氏情報提供
24	田志喜志	母間田志喜志・西田志喜志	台地	歴史	青磁・染付	昭和62年度分布調査
25	中和原	母間中和原	台地		土器片	農政関係分布調査
26	宮城	母間宮城	台地		土器	農政関係分布調査
27	トビラ	井之川トビラ	砂丘		土器片	町田進氏情報提供
28	カンジャエ	亀徳カンジャエ	岩陰	歴史	羽口	カジ跡

第2節　天城町管内の遺跡

天城町内における遺跡の分布状況は，1985年発行の鹿児島県市町村別遺跡地名表では大城跡・大和城跡・玉城跡の3箇所が記載されているが，鹿児島大学の上村俊雄氏は同年3月発行の「南日本文化第17号」『徳之島の先史時代』で新たに千間遺跡・塔原遺跡等7遺跡を紹介された。この他，1985年には熊本大学文学部考古学研究室により玉城遺跡の発掘調査が実施されたが，この調査と併行して分布調査も行われ，あらたに数箇所の遺跡が発見された。その後，鹿児島県文化課による分布調査でも，鬼入塔遺跡等が確認されている。以下概要を述べる。

大城跡（松原字大城山）(92—1)

徳之島町との境界をなす大城山の頂上付近にあり，馬蹄形の平坦面と土塁状の施設及び平坦面を取り囲む石垣状の石積み等がある。

大和城跡（天城字上名道）(92—2)

大和城山の頂上付近にあったとされているが，頂上付近は第2次世界大戦時に高射砲陣地が構築されたため，地形が変形して，旧地形は残されていない。

玉城跡（天城字真瀬名）(92—3)

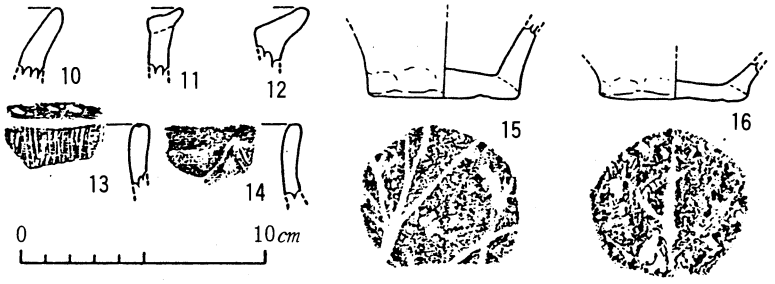
玉城遺跡については，熊本大学考古学研究室の活動報告19「玉城遺跡」において詳しく報告されているのでここでは略述する。熊本大学の調査では4組の遺構が確認され，遺物もカムイヤキ窯系の陶片を中心に白磁・青磁・陶器・染付・土器片等が出土し，その年代も13～14世紀の可能性が大きいことが指摘されている。

オガミヤマ遺跡（岡前オガミヤマ）(92—10)

標高約30mの独立丘陵上にある遺跡で一部は削り取られている。その壁断面において遺物包含層が確認され，青磁片等が認められる。

馬塔遺跡（岡前馬塔）(92—5)

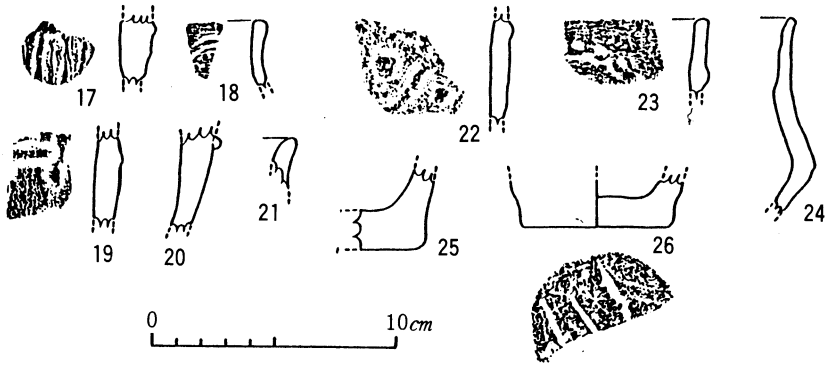
中川の北にある標高約5mの砂丘上に位置する遺跡で，地表下約2mの赤土層が遺物包含層と考えられる。土器には兼久式に相当するものがふくまれている。



第6図　馬塔遺跡採集遺物(熊本大学報告より)

戸ノ木遺跡（岡前戸ノ木）(92—8)

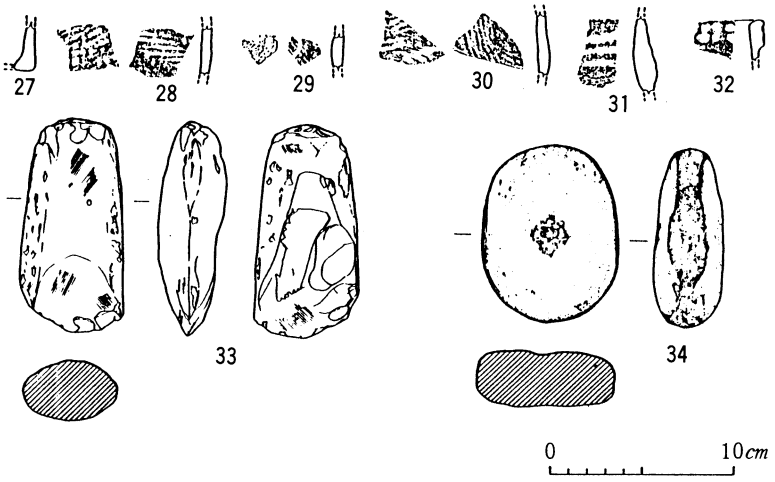
浅間の西側の海岸近くの標高約5mの砂丘にある遺跡であるが，砂採取や耕地整理・天地返し等により相当の破壊を受けている。遺物は兼久式土器を中心に採集されている。



第７図　戸ノ木遺跡採集遺物(熊本大学報告より)

大久保遺跡（天城大久保)(92—13)

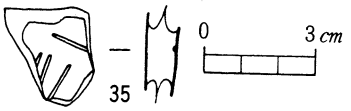
平土野港より北へ約1000m，湾屋川の南の標高約10m の台地上にある遺跡で，広範囲に及ぶ。採集されている遺物は，押引文の施された土器片とカムィヤキ窯産と思われる陶器片，石器（石斧・すり石・凹石）等がみられる。



第８図　大久保遺跡採集遺物(熊本大学報告より)

平土野原遺跡（天城平土野原)(92—14)

平土野港の東方で天城小学校の西側に位置する標高約30 m の台地上にある遺跡で，土器の小片が採集された。35はヘラ描きの細い沈線文を施すもので縄文時代と考えられる。

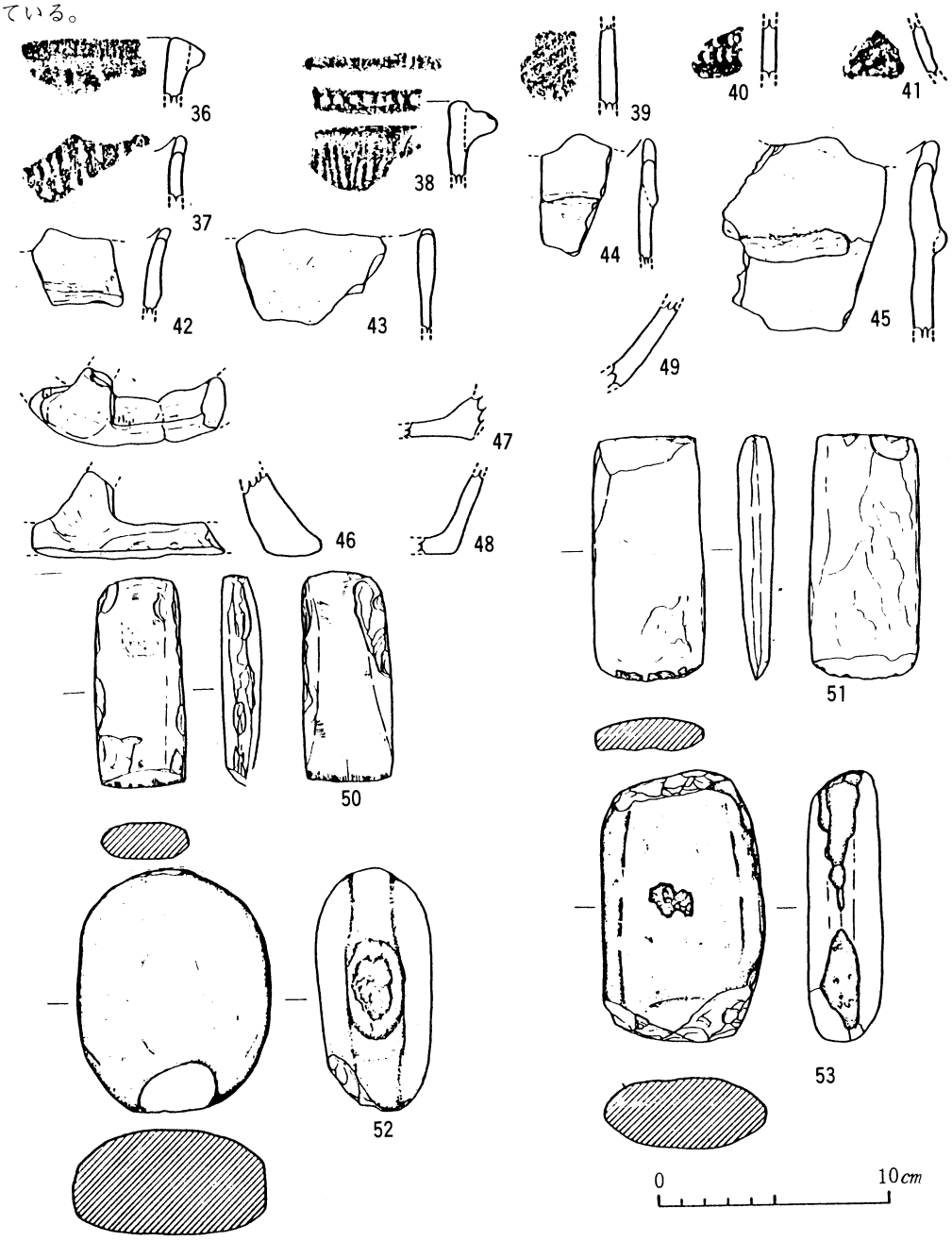


第９図　平土野原遺跡採集遺物

塔原遺跡（兼久塔原)(92—15)

千間遺跡より約 500 m 南の西海岸に面した標高約80m の台地上に位置する遺跡である。かなり以前から知られていた遺跡で，広範囲にわたって遺物の散布が認められた。本遺跡を発見し

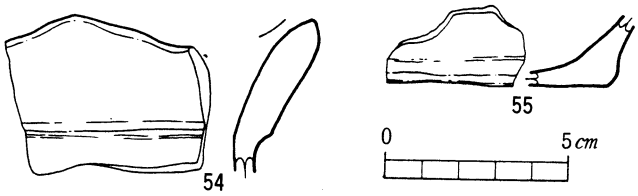
遺物の採集を続けている農業・向井一雄氏の採集資料には黒耀石片や・黒耀石製の石鏃も含まれている。遺物については，熊本大学考古学研究室活動報告「玉城遺跡」により紹介されているので転載する。当遺跡の土器の大半は沖縄で出土するカヤウチバンタ系の土器に類似すると報告されている。また，昭和63年７月には熊本大学により調査が実施され，住居跡も確認されている。



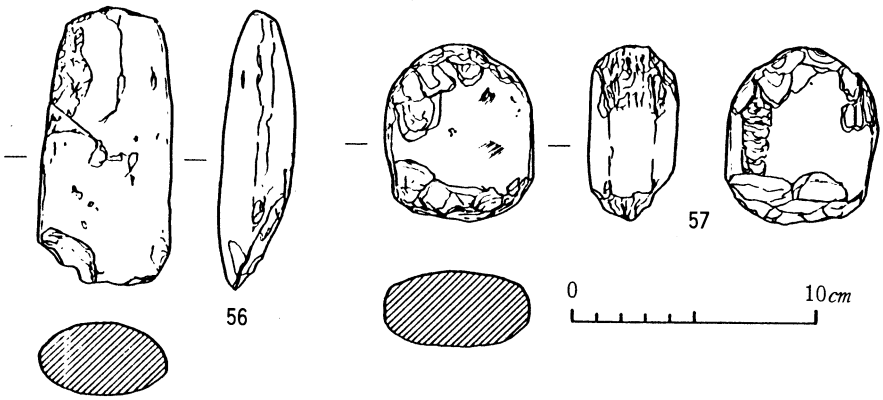
第10図　塔原遺跡採集遺物(熊本大学報告より)

鍋窪遺跡（兼久鍋窪）(92—16)

塔原遺跡より南へ約500 m離れた海岸沿いの急峻な崖の上に位置し，千間遺跡と谷を挟んで対峙している。遺物は石器・土器が採集されている54は口縁部でやや肥厚する。55は底部である。56は石斧，57は敲石で上下に敲打痕が顕著に認められる。



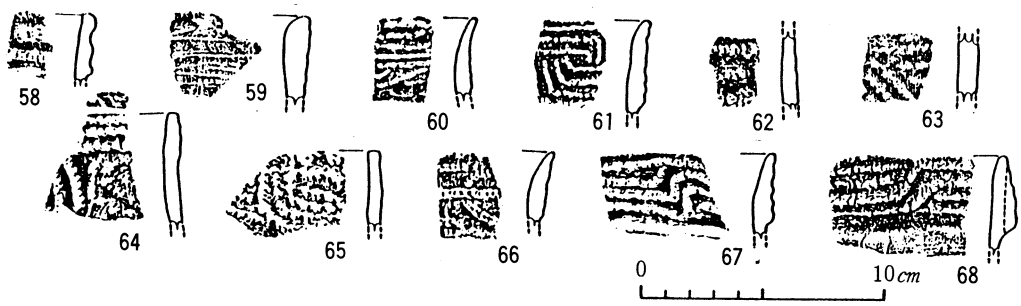
第11図　鍋窪遺跡採集遺物



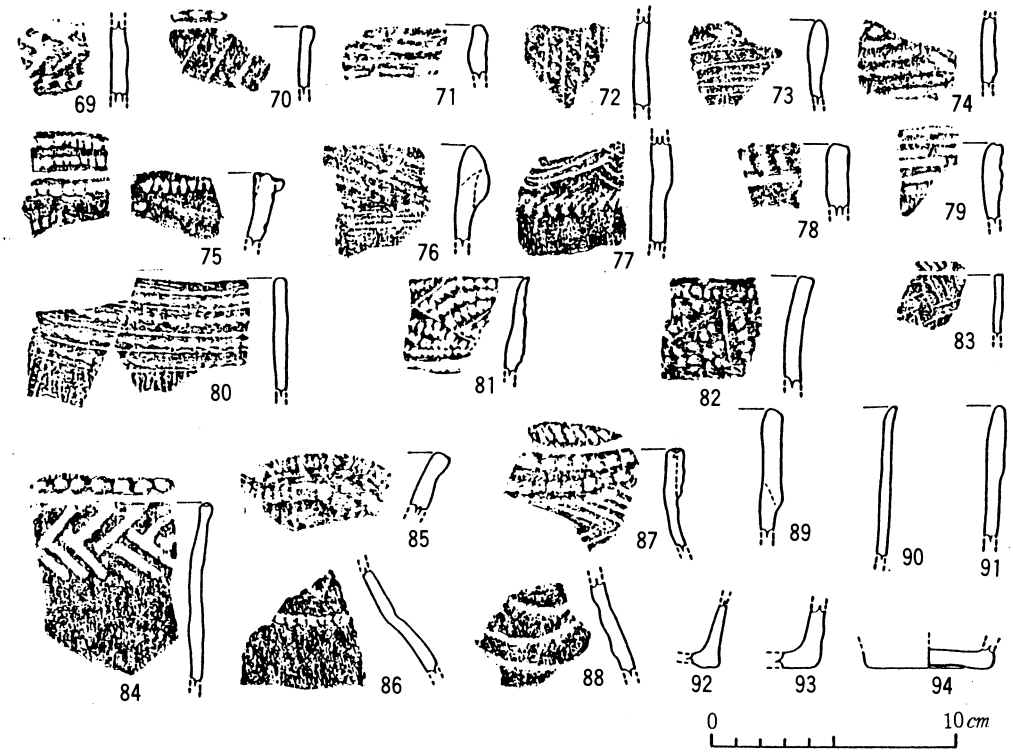
第12図　鍋窪遺跡採集遺物(熊本大学報告より)

千間遺跡（大津川千間）(92—17)

徳之島の西海岸に位置する千間海岸を臨む標高約70m の隆起石灰岩の台地上にある遺跡で，かなり以前から知られていた遺跡である。遺物は土器片・石器が多く採集されており，上村氏および熊本大学により紹介されている。本報告では熊本大学の了解を得て資料を転載する。遺物についての詳細な説明は報告書にあるので，ここでは簡単に紹介するにとどめるが，58・60～68は面縄東洞式に，80～82は嘉徳Ⅰ式に，83は嘉徳Ⅱ式にあたるとされている。また，84は南九州の縄文時代中期末～後期前半の阿高式土器との関連性も考えさせられるものと言われている。



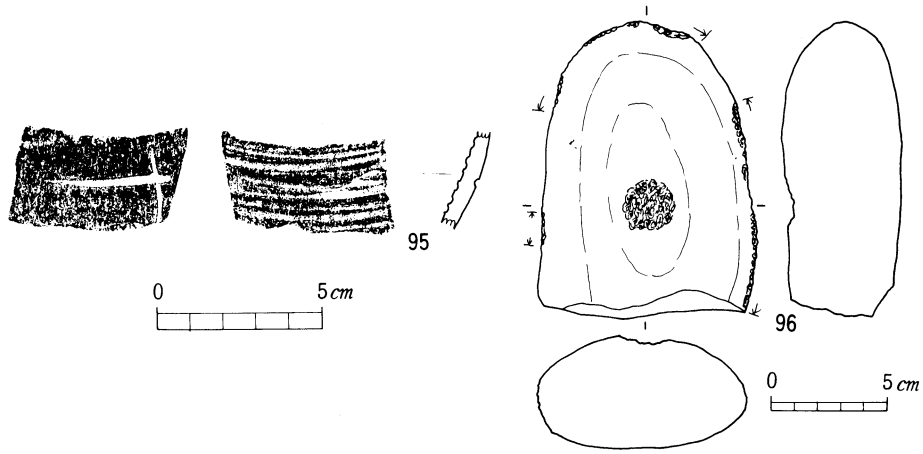
第13図　千間遺跡採集遺物(熊本大学報告より)



第14図　千間遺跡採集遺物(熊本大学報告より)

長竿(ナガサオ)遺跡（瀬滝長竿）(92—18)

県営土地改良事業「天城南部地区」計画地内で発見された遺跡である。千間海岸を見下ろす標高約80mの台地上にある。95はカムィヤキ窯産と思われる陶質土器で外面にはヘラ記号状の沈線が見られる。96は凹石である。側面には敲打痕が顕著に認められる。



第15図　長竿遺跡採集遺物

第2表　天城町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
92—1	大城跡	松原大城山	山頂	歴史		
2	大和城跡	天城上名道	山頂	歴史		
3	玉城跡	天城真瀬名	丘陵	歴史	磁器・カムィヤキ産陶片・土器	昭和59年熊本大学調査
4	アガリン竿	松原アガリン竿	台地	歴史	岩石製フイゴ羽口	正確な位置については未確定
5	馬塔	岡前馬塔	砂丘	縄文・弥生	土器片・石器	
6	尾志理田	川津部	砂丘		土器片	
7	オカゼン	岡前	砂丘		土器片	
8	戸ノ木	岡前戸ノ木	砂丘	弥生	土器片(兼久式)	
9	塩浜	岡前塩浜	砂丘		土器片	
10	オガミヤマ	岡前オガミヤマ	独立丘陵	歴史	青磁・土器片	
11	中尾宮塔	岡前中屋宮塔	台地	歴史	磁器・陶器片	昭和63年文化課調査
12	鬼入塔	浅間鬼入塔	台地	歴史	青磁・白磁・染付	昭和63年文化課調査
13	大久保	天城大久保	台地	縄文・歴史	土器・カムィヤキ産陶質土器	
14	平土野原	平土野平土野原	台地	縄文	土器片	
15	塔原	兼久塔原	台地	縄文	土器・石器	昭和63年熊本大学調査
16	鍋窪	兼久鍋窪	台地	縄文	土器・石器	
17	千間	大津川千間	台地	縄文	土器・石鏃	
18	長竿	瀬滝長竿	台地	歴史	磁器・凹石	昭和63年文化課調査
19	利秋神線刻岩	瀬滝秋利神				
20	西阿木名線刻礫	西阿木名				
21	西阿木名	西阿木名		歴史	完形壺	犬田布岬岩井博物館蔵

第3節　伊仙町管内の遺跡

伊仙町は，昭和の初期に面縄貝塚の発見・調査が行われるなど，南島においては早い段階で考古学のメスが入れられた所である。その後も喜念原始墓の調査・九学会連合会の調査・河口貞徳氏・南日本文化研究会・鹿児島大学の調査等多くの人々による調査が実施されている。また，伊仙町内においても義憲和氏・四本延宏氏等が精力的に分布調査を行っており，カムィヤキ古窯址群のような画期的な発見もある。

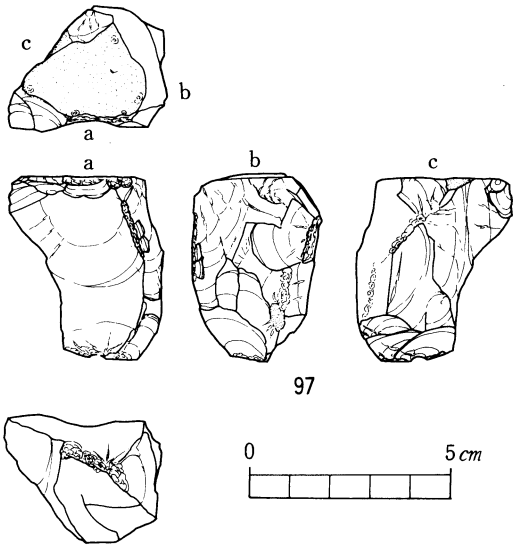
近年においては，昭和57年・59年の面縄貝塚の重要遺跡確認調査を皮切りに犬田布貝塚・カムィヤキ古窯址群・ヨヲキ洞穴・喜念原始墓と相次いで発掘調査が実施され，豊富な情報が得られた。

昭和59年度鹿児島県教育委員会発行の「鹿児島県市町村別遺跡地名表」によると伊仙町内の遺跡は45箇所あるが，今回の調査で新たに2箇所の遺跡を確認した。また，その後の農政関係

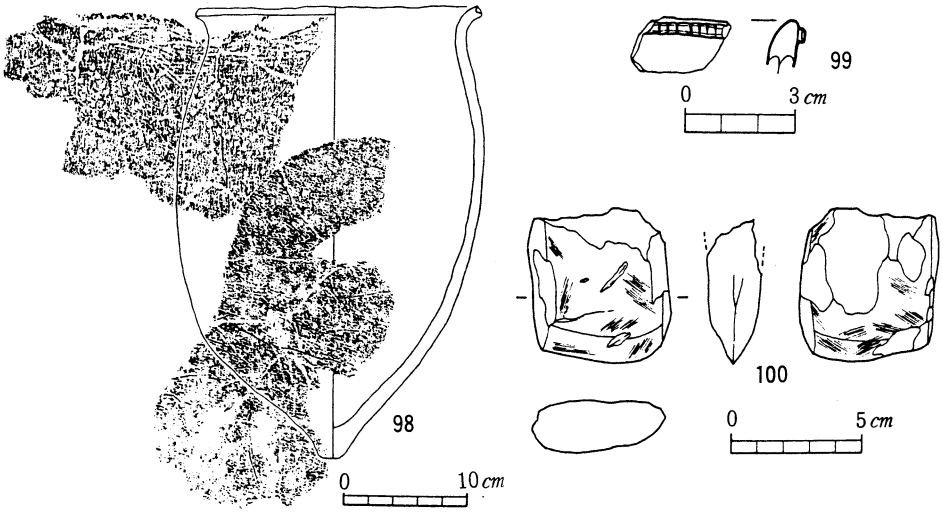
の分布調査で2遺跡が確認され，ヨヲキ洞穴の調査において発見されたヤナギダ古窯址を合わせると5遺跡が増えたことになる。以下，遺跡の概要を述べる。

本川遺跡（ホンガワ）（喜念）(93—6)

本川遺跡は，徳之島町との境をなす本川の河口近くの標高約50mの台地上にある遺跡である。97は台石を用いた両極技法による石核である。上下両端からの剝離面が見られる。b面に石核調整剝離が施されている。石材はチャート。98は当時伊仙町歴史資料館勤務の四本延宏氏が採集した土器で，ヨヲキ洞穴の報告書で紹介されたものである。乳房状の底部からゆるやかにふくらむ胴部となり，頸部でしまり口縁部は外反する器形を呈する。内外面共に条痕が認められ，口縁部には刺突連点文，胴部上位には3条の連点文を斜位に施すもので，縄文時代のものと考えられる。



第16図　本川遺跡採集遺物



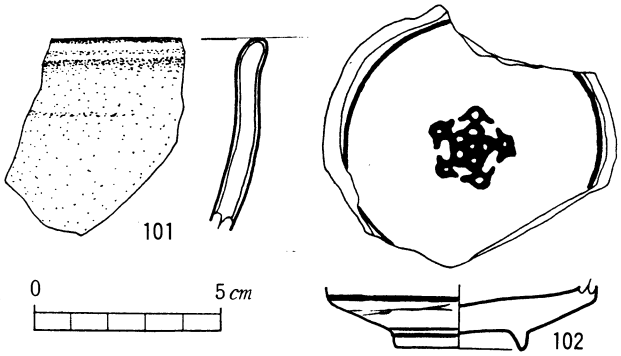
第17図　本川遺跡採集遺物

ミンツキ集落跡（伊仙ミンツキ）(93—23)

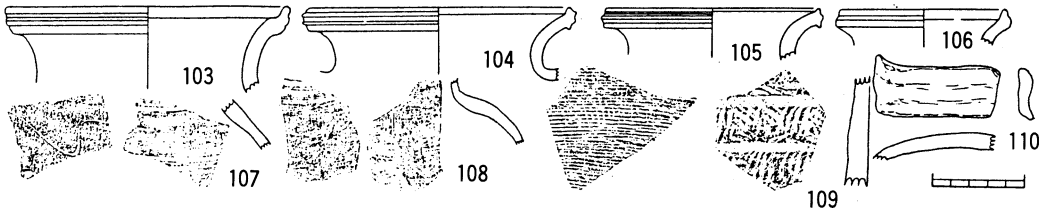
ミンツキ集落跡は，徳之島農業高校の北方，標高約70mの平地にある遺跡でカムィヤキ産と思われる陶質土器・青磁・白磁・染付等多量の遺物が採集されている。101は青磁。102は染付で見込みに五弁花文，外面に松葉文がみられる。

ヤナギダ古窯址（阿三ヤナギダ）(93—46)

ヤナギダ古窯址は，ヨヲキ洞穴の調査において発見された遺跡で，標高約160 mの傾斜地にあり，ヨヲキ洞穴，カムィヤキ古窯址群と隣接した位置関係にある。周辺の確認調査では，6箇所の灰原と1箇所の焼土らしい痕跡が発見されている。採集された遺物は，カムィヤキ古窯址群のものと区別がつけられないほど類似しており，当時この一帯において大がかりな陶質土器の生産が行われていたものと考えられる。



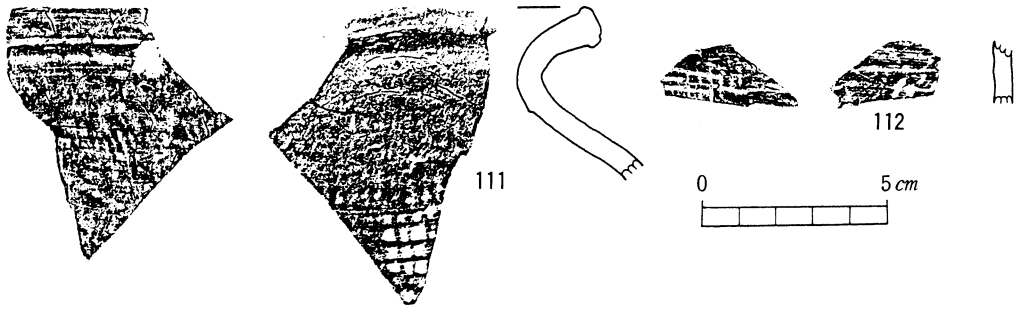
第18図　ミンツキ集落跡採集遺物



第19図　ヤナギダ古窯址採集遺物

中山（ネーマ）神社遺跡（中山）(93—48)

中山神社遺跡は，伊仙町文化財保護審議会委員の義憲和氏により発見された遺跡である。遺跡の一部は削平されているが，カムィヤキ産と思われる陶質土器が採集された。



第20図　中山神社遺跡採集遺物

アジフーB遺跡（犬田布）(93—50)

アジフー遺跡は明眼の森の南方の標高約120 mの台地上にあり，青磁片・チャート片が採集された。

第３表　伊仙町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
93—1	上成川遺跡	糸木名上成川	丘陵	縄文	チャート	表採
2	喜念貝塚	喜念兼久	海浜 砂丘	縄文(後) 弥生(後)	縄文式土器,貝符,貝器,宇宿上層式土器	1936年人類学16 1976年南文研９号
3	面縄第４貝塚	面縄兼久パル661番	丘陵地 さんご礁	縄文(後)	爪形文土器,刺突文土器,土器,石器	1984年発掘,1978年 伊仙町誌, 1959年九学会報告書
4	犬田布貝塚	犬田布連木芋	谷状地 さんご礁	弥生(前)	面縄西洞式,石器,宇宿上層式,貝器沈線文土器,献器	1983年発掘 1984年伊仙町埋文報告書Ⅱ
5	ヨヲキ洞窟	阿三ヨヲキ	さんご礁 崖	弥生	爪形文,宇宿上層,石器,須恵器	表採
6	本川遺跡	喜念	丘陵	弥生(前)	土器,弥生式土器,石器	表採
7	下板割遺跡	伊仙下板割	沖積地 畑地	弥生	弥生式土器,石器	表採
8	瀬田海遺跡	伊仙	沖積地 崖	弥生	弥生式土器,石器,貝輪	表採
9	犬田布記念碑遺跡	犬田布	沖積地 畑地	弥生	土器,石器	表採
10	佐弁貝塚	佐弁ミヤドバル	海浜 砂丘	弥生(後)	弥生式土器,石器(すり石)	表採1978年伊仙町誌
11	東浜貝塚	東面縄	海浜 砂丘	弥生(後)	弥生式土器,石器	表採1978年伊仙町誌
12	喜念上原遺跡	喜念上泉袋	丘陵	弥生(後)	弥生式土器,無紋土器,石器	表採
13	喜念原始墓	喜念ミズノーイ	丘陵	弥生(後)	弥生人骨,土器,貝塚	1978年伊仙町誌, 1935年京大三宅ドルメン第四の六
14	面縄第３貝塚	面縄兼久パル	さんご礁 丘陵	弥生(後)	兼久式土器,石器,貝塚	1956年九学会報告書 1984年発掘
15	アマングスク	木の香	谷状地	弥生	弥生式土器	1984年中世城館報告, 表採
16	アジフー	伊仙犬田布	沖積地 畑地	弥生～中世	弥生式土器,須恵器,青磁	表採
17	面縄按司城跡	面縄ウガン	丘陵	中世	須恵器,青磁	表採, 1984年中世城館報告
18	カムィヤキ古窯跡群	阿三カムィヤキ	谷状地	中世(初)	陶質土器,窯跡	表採 1984年発掘調査
19	アザマグスク(タニ)	阿三	丘陵	中世(初)	タタキ石,須恵器	1984年中世城館報告, 表採
20	ヲネガン	喜念スーパテ	丘陵	中世	青磁,中国陶磁	1984年中世城館報告, 表採
21	フードグスク	阿権大当原	丘陵	中世	青磁,中国陶磁	1984年中世城館報告, 表採
22	トラグスク	検福古里	丘陵地		須恵器,青磁	1984年中世城館報告, 表採
23	ミンツキ集落跡	伊仙	沖積地 畑地	中世	須恵器,青磁	表採(海抜70～100m) 1978年伊仙町誌
24	妙巌按司城跡	大字犬田布字明眼				
25	あざま按司城跡	阿三字谷俣				
26	恩納城跡	上面縄				
27	喜念権現,新田神社	喜念			名勝史跡	昭和53年２月町指定
28	喜念浜砂丘	喜念	海浜 砂丘		名勝史跡	昭和53年２月町指定
29	面縄古井戸	面縄			史跡	昭和53年２月町指定

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
93—30	蔵屋敷跡	面縄			史跡	昭和53年2月町指定
31	高千穂神社 ディゴの大木	面縄,高千穂神社			名勝史跡, 植物	
32	面縄村外165 村戸長役場跡	上面縄			史跡	1978年伊仙町誌 昭和53年2月町指定
33	検福穴八幡	上検福			名勝史跡	〃
34	てんちゅうあもれ 伝説の地 (ナーマンゾウカナシ)				史跡	
35	高倉	伊仙1842			建造物	〃
36	ガジュマル老木	伊仙小学校内			植物	〃
37	義名山の森	義名山地区			名勝史跡	〃
38	墓地(ねーま遠留)	中山			史跡	〃
39	高倉	阿三(永宅)			建造物	〃
40	明眼の森	犬田布			名勝史跡	〃
41	犬田布岬	犬田布			名勝史跡	〃
42	暗川(クラゴー)	小島			名勝史跡	〃
43	面縄第二貝塚	面縄兼久パル	砂丘	縄文(後)	喜徳一式・二式,宇宿上層式 骨器・貝器	1982年発掘, 1983年伊仙町埋文報告書(1)昭和53年2月町指定
44	前泊西貝塚	西犬田布	谷状地 さんご礁	弥生	チャート,弥生式土器	表採, 〃
45	面縄第1貝塚	面縄兼久パル	さんご礁 沖積地 谷状地	縄文(後) 〜 弥生(後)	爪形文土器・貝輪, 市来式土器 弥生式土器, 人骨	1982年発掘, 1983年伊仙町埋文報告書(1)昭和57年9月町指定
46	ヤナギダ古窯址	阿三ヤナギダ	傾斜地	中世	須恵質陶器窯	昭和60年文化課ヨヲキ洞穴調査の折発見
47	勘花	鹿浦勘花	台地			昭和63年農政関係分布調査
48	中山神社	中山	台地	中世	カムィヤキ	昭和62年奄美分布調査
49	上水留	目手久			無文土器	昭和63年農政関係分布調査
50	アジフーB	犬田布	台地	中世	青磁	昭和62年奄美分布調査

第Ⅳ章　ナーデン当遺跡の発掘調査

第1節　調査の経過

今回の奄美地区埋蔵文化財分布調査の実施要項には，田畑一筆ごとの悉皆調査と共に必要に応じて試掘調査を実施し，遺跡の精密な情報を得ることがうたわれている。徳之島におけるこれまでの調査は，海岸部分を中心に実施されてきており，今回は海岸部分の遺跡との比較を行うという意味から，徳之島町の内陸部に位置するナーデン当遺跡を選んで試掘調査を行うことにした。この地は国営畑かん事業区域内であり，埋蔵文化財の保護と畑かん事業の円滑な推進を図るための資料を得る必要もあったので，緊急に対応することにした。

第2節　遺跡の位置及び環境

ナーデン当遺跡は，鹿児島県大島郡徳之島町諸田中代ナギタにある。徳之島の主峰井之川岳の裾部にあたり，標高116m，海岸からの距離 2.5 kmの内陸部に位置する。周辺の地形は起伏の激しい丘陵が幾つも続いており，ナーデン当遺跡はその中の１つの丘陵上にある。南側には30mの比高差をもって井之川が流れている。

遺跡地は現在サトウキビ畑として利用されており，周辺の傾斜地は常緑樹が生い茂っている。

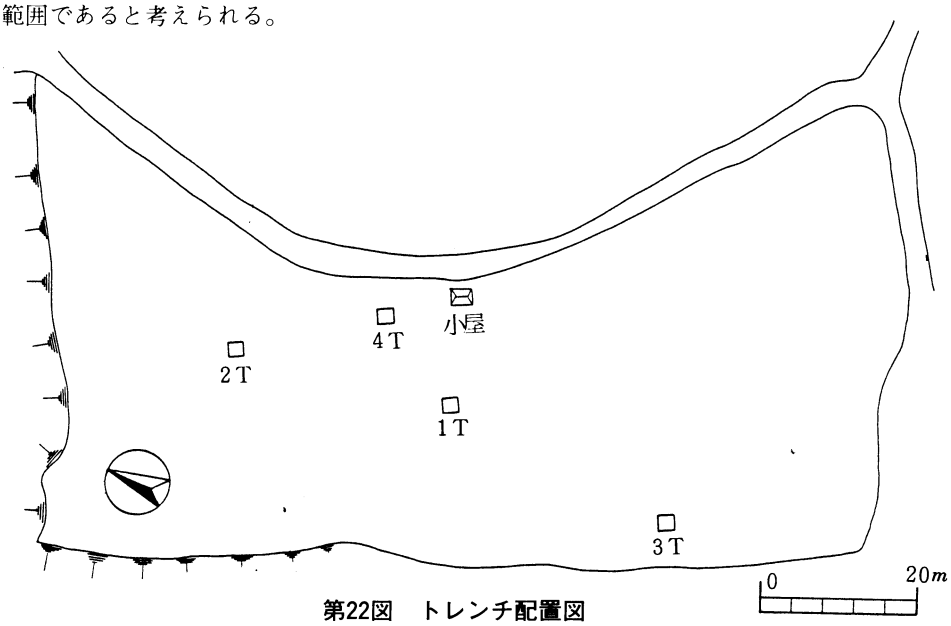
本遺跡は，地元の町田進氏によって発見され，採集された

第21図　ナーデン当遺跡周辺の地形図

遺物は，徳之島町資料館に展示されている。

第３節　調査の概要

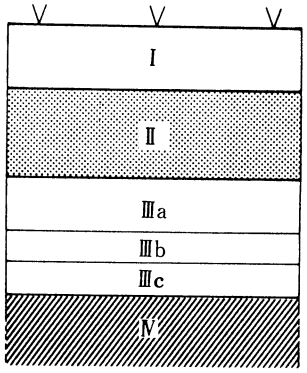
調査は畑地内に２ｍ×２ｍのトレンチを４カ所設定して行った。昭和30年代の開拓事業により，削平され，赤土が露出している西側は除いた。畑のほぼ中央にある第１トレンチは，包含層がわずかに残っていた。北東側の第４トレンチは，Ⅱ層の包含層がかなり厚く，谷部の方へ低くなるにしたがって，包含層が良好に残っていると思われる。最も高い位置にある第３トレンチには，遺物包含層は認められないが，周辺の畑全体に多くの遺物が散布していることから，Ⅲ層に掘り込まれたなんらかの遺構が存在する可能性がある。これらのことから畑全体が遺跡地の範囲であると考えられる。



第22図　トレンチ配置図

第４節　層　　位

４本のトレンチのうち，完全な形で６枚の地層が残っているトレンチは１本もなかった。第２と第４トレンチの層序を基準として他のトレンチにも対比した。マージ以下の層位は確認していない。



第23図　基準層位

Ⅰ　：耕作土。

Ⅱ　：明褐色土。やや粘質を帯び，しまりがある。
　　遺物包含層である。

Ⅲa：黄色粘質土。

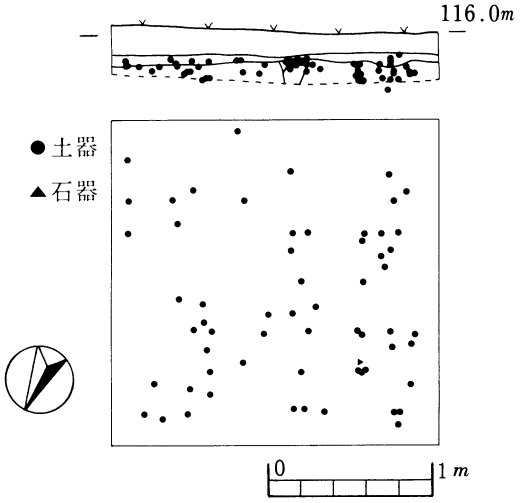
Ⅲb：黄色粘質土，黒色の礫を多く含む。

Ⅲc：黄色粘質土。Ⅲaとの区別はつかない。

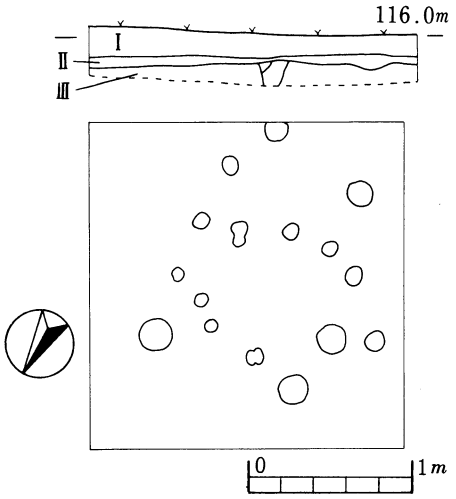
Ⅳ　：赤褐色粘質土。マージ土である。

第5節　第1トレンチ

畑地のほぼ中央にあり，地表の標高は116 m である。削平が著しく，Ⅱ層は2～8 cmしか残っていない。Ⅲ層上面で精査し，18個のピットを検出した。埋土はⅡ層と全く同一で，全てのピットに違いはみられない。平面は円形をなし，直径10cm大が13個，18cm大が5個確認された。深さについては未調査である。並びは不揃いで，調査面積も小範囲のため，全体形状は不明である。Ⅰ層・Ⅱ層から大量の遺物が出土した。



第24図　第1トレンチ実測図

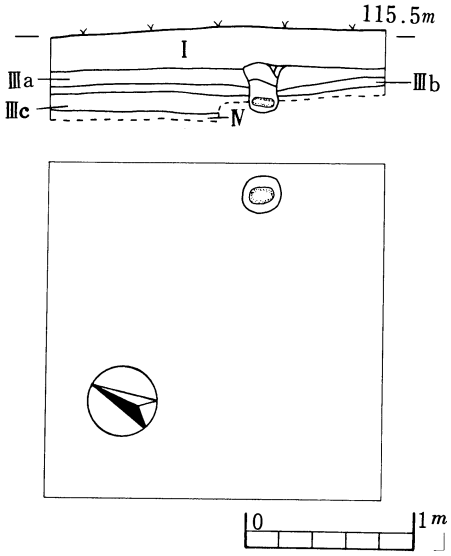


第25図　第1トレンチ遺構実測図

第6節　第2トレンチ

第1トレンチから30m北側に第2トレンチを設定した。谷部の奥まった部分で，地表の標高は115.55m を測る。Ⅰ層が24cmと厚く，Ⅱ層の包含層は削平され，全く残っていない。Ⅲ層上面でピットを1個検出した。検出面での直径は24cmで，深さは30cmを測る。Ⅳ層のマージ土までは達していない。埋土は3層に分けられる。いちばん上の層でⅡ層と同一の層がわずかに認められる。まん中の層は，Ⅱ層よりも黄色が強い粘質土である。いちばん下が，茶褐色を呈するやわらかい層である。床面に近いところで，凹部を下にした凹石が水平に置かれていた。

確認できた遺構と遺物は，ピットと凹石だけで，耕作土中からも遺物は全く出土しなかった。

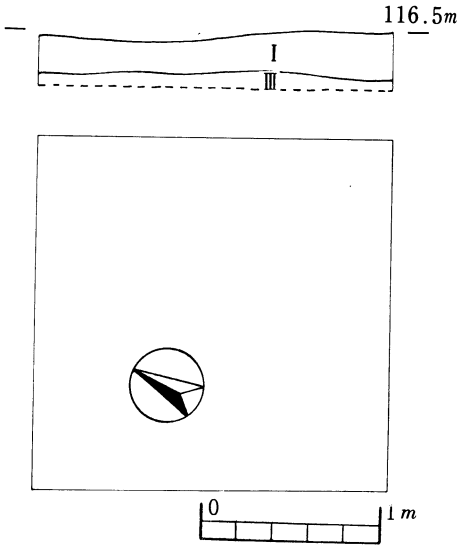


第26図　第2トレンチ実測図

第7節　第3トレンチ

第1トレンチから32m南側に第3トレンチを設定した。地表面の標高は116.5mを測り，この台地上では最も高位置である。20cmほどで黄色粘質土のⅢ層に達した。Ⅰ層からは遺物が多く出土するが，Ⅲ層上面では全く遺構・遺物は検出されなかった。

第3トレンチから北西側及び南側は削平が著しく，Ⅱ層の包含層にも影響を与えていると考えられる。しかし，地表面や耕作土中には多くの遺物が包蔵されている。このようなことから，当時の生活面の範囲は台地全体に及び，Ⅲ層に掘り込まれたなんらかの遺構が存在する可能性がある。

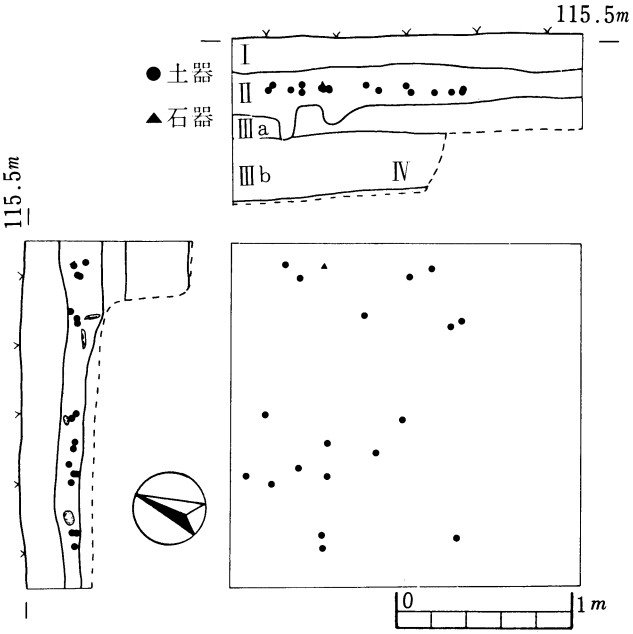


第27図　第3トレンチ実測図

第8節　第4トレンチ

第1トレンチから14m北東に第4トレンチを設定した。地表面の標高は115.54mを測る。Ⅱ層の包含層は24cmと厚い。その下のⅢa層，Ⅲb層も他の位置に比べて厚く堆積しており，東側に低くなるにしたがってⅡ層の包含層が良好に残っていると思われる。

遺構らしきものは確認できなかったが，遺物量は第1トレンチに次いで多い。189の片刃石斧は刃部を上にして垂直にたった状態で検出された。



第28図　第4トレンチ実測図

第9節　遺　　物

1　土　　器

土器は表面採集品も含めると総数2798点である。この内，各トレンチの表土層以外の層から出土した特徴のある土器のみ76点を図示した。口縁部から底部まで続く完形品は1点もなく，全て小破片のみであり，全形を知ることは困難である。無文の土器と有文の土器があり，無文の土器の方が圧倒的に多い。また，口縁部が多くみられるのに対し，底部は全くみられないのが大きな特徴である。

土器は大きく分類すると，有文と，無文に分けることができる。しかし，この分類は小破片のため，同一個体の異なった部位を分けている可能性もあるが，ここでは便宜上分類する。

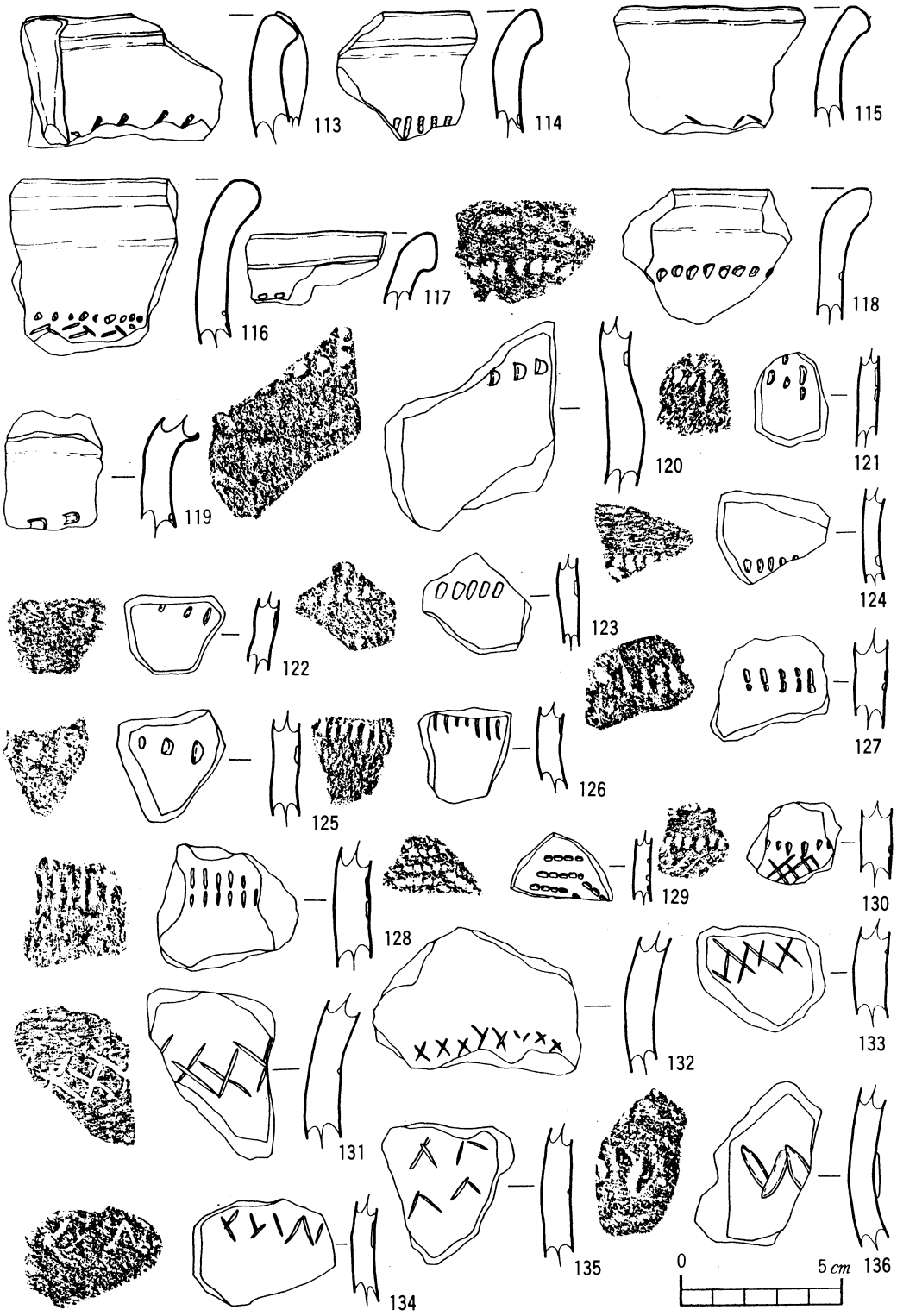
有文土器は陰刻して文様が描かれたものと，粘土を貼付けて文様にするもの（136）がある。また，両方とも兼ね備えたもの（113）もある。陰刻して文様が描かれたものに，文様を施す道具によってさらに，ヘラ状工具，半截竹管，貝殻腹縁の3通りに分けられる。

無文土器は口縁部の形態によって，外反するものと，内湾するものとに分けられる。口縁部が外反するものには，肥厚せず一定の厚さのもの，口縁部全体を肥厚させるもの，口唇部下端を間延びさせるもの，さらに肥厚部を誇張して二叉口縁状にするものがみられる。有文土器も，形態的には口縁部が外反し，口唇部のおさめかたも無文土器に似ており，両者の近似性が指摘できる。

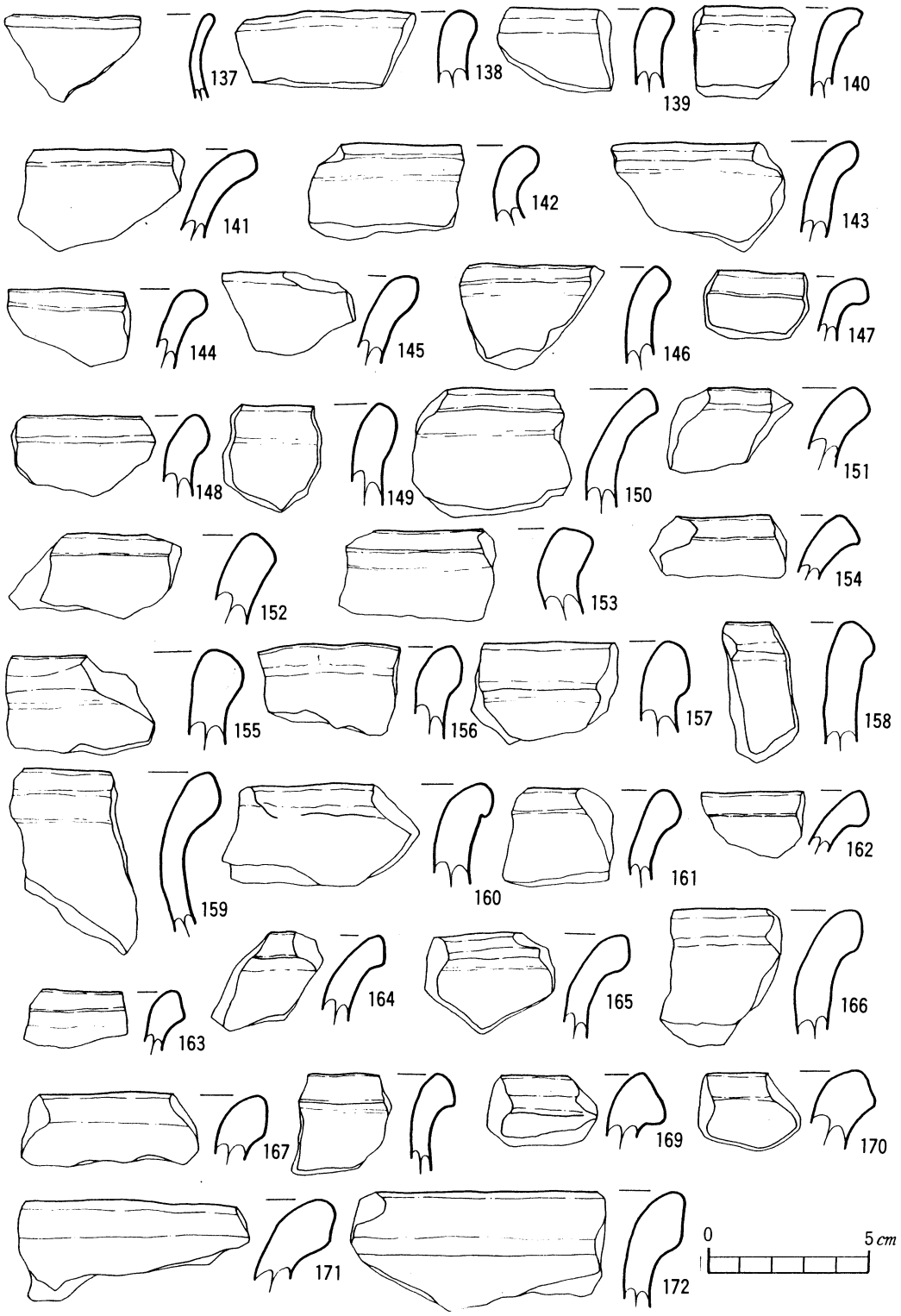
第4表　土器観察表

番号	区　層	色　調	器面調整	遺物No	備　　考	番号	区　層	色　調	器面調整	遺物No	備　　考
113	1－Ⅱ	灰赤褐色		30	縦方向の隆帯と列点	131	1－Ⅱ	褐色		56	ヘラ状による交叉文
114	1－Ⅱ	橙褐色		34	貝殻腹縁による列点	132	1－Ⅱ	橙褐色		5	ヘラ状による交叉文
115	1－Ⅱ	橙褐色		21	列点の下に交叉文	133	4－Ⅱ	褐色		—	ヘラ状による交叉文
116	1－Ⅱ	橙褐色		26	列点の下に交叉文	134	4－Ⅱ			—	ヘラ状による交叉文
117	1－Ⅱ	橙色		4	列点	135	4－Ⅱ	褐色		65	ヘラ状による交叉文
118	1－Ⅱ	褐色		60	太めの列点	136	4－Ⅱ	橙褐色		—	浮文による交叉文
119	1－Ⅱ	暗橙褐色		19	太めの列点	137	4－Ⅱ	橙褐色		—	薄く，肥厚しない
120	1－Ⅱ	橙褐色		—	竹管状の太めの列点	138	4－Ⅱ	橙褐色		78	肥厚しない
121	4－Ⅱ	橙褐色		—	列点	139	4－Ⅱ	淡橙褐色		—	肥厚しない
122	4－Ⅱ	橙褐色		—	列点	140	4－Ⅱ	暗橙褐色	ミガキ	—	口唇部が間延びする
123	4－Ⅱ	暗橙褐色		—	貝殻腹縁による列点	141	4－Ⅱ	橙褐色		—	摩耗が著しい
124	4－Ⅱ	淡橙褐色		—	列点	142	1－Ⅱ	淡褐色		32	肥厚せず強く外反
125	4－Ⅱ	橙褐色		—	竹管状の太めの列点	143	1－Ⅱ	橙褐色	ヘラナデ	45	肥厚せず強く外反
126	4－Ⅱ	鈍橙褐色		—	列点	144	1－Ⅱ	淡橙褐色		24	わずかに肥厚
127	4－Ⅱ	橙褐色		—	列点	145	4－Ⅱ	灰赤褐色		—	口唇部が尖る
128	1－Ⅱ	橙褐色		54	貝殻腹縁による列点	146	1－Ⅱ	橙褐色		2	口唇上端部が尖る
129	4－Ⅱ	褐色		—	貝殻腹縁による押圧	147	4－Ⅱ	淡褐色		—	肥厚せず強く外反
130	4－Ⅱ	褐色		72	列点の下に交叉文	148	1－Ⅱ	淡橙褐色		6	やや肥厚する

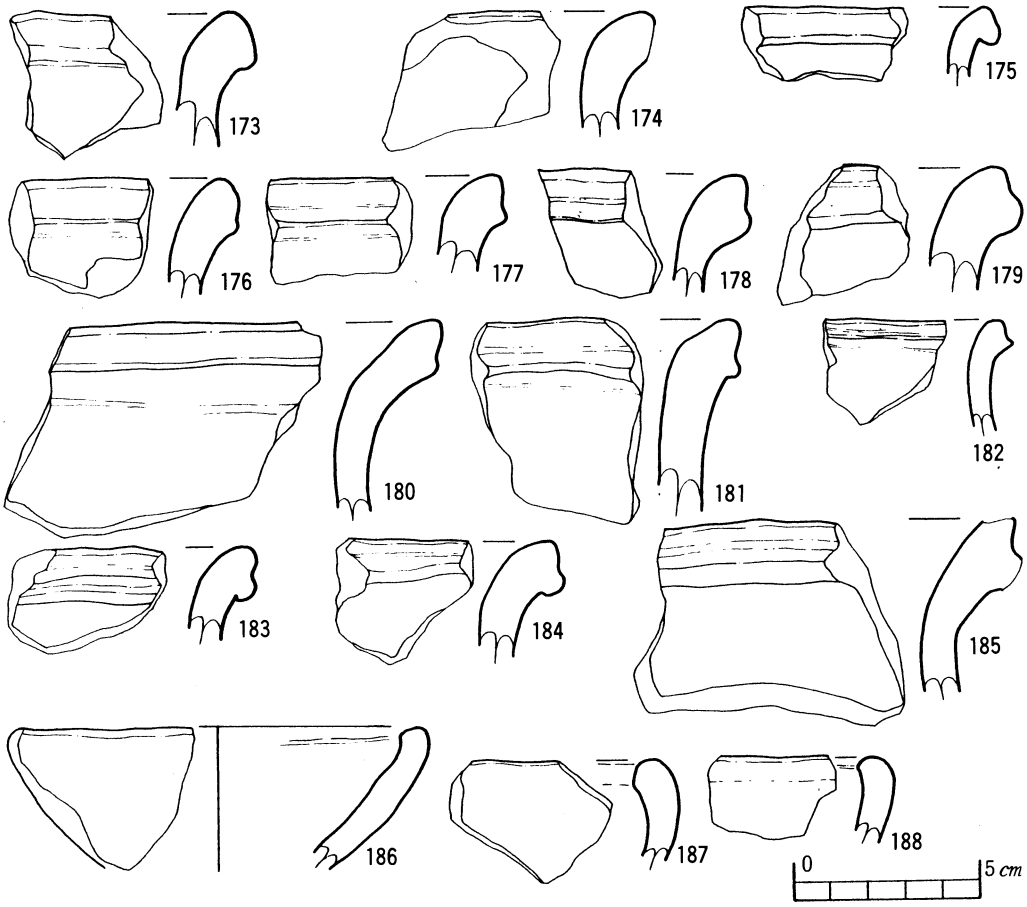
番号	区　層	色　調	器面調整	遺物No	備　　考	番号	区　層	色　調	器面調整	遺物No	備　　考
149	1－Ⅱ	橙褐色		17	肥厚しない	169	1－Ⅱ	橙褐色		—	断面三角形
150	1－Ⅱ	橙褐色		48	肥厚せず強く外反	170	1－Ⅱ	橙褐色		37	断面三角形
151	1－Ⅱ			12		171	1－Ⅱ	橙褐色		42	やや間延びした肥厚
152	1－Ⅱ	橙褐色		18	肉厚	172	1－Ⅱ	橙褐色		43	やや間延びした肥厚
153	1－Ⅱ	褐色		28	肉厚	173	1－Ⅱ	橙褐色		16	断面三角形
154	1－Ⅱ	橙褐色		—	口唇下端部が間延び	174	4－Ⅱ	褐色		76	
155	4－Ⅱ	橙褐色		69	丸く肥厚する	175	1－Ⅱ	褐色		23	断面三角形
156	1－Ⅱ	橙褐色		22	口唇下端部を肥厚	176	1－Ⅱ	褐色		52	やや間延びした肥厚
157	1－Ⅱ	橙褐色		58	丸く肥厚する	177	4－Ⅱ	橙褐色		77	断面三角形やや二叉
158	1－Ⅱ	橙褐色		—	丸く肥厚する	178	4－Ⅱ	橙褐色		—	断面三角形やや二叉
159	1－Ⅱ	橙褐色		31	口縁部全体を肥厚	179	1－Ⅱ	褐色		20	断面三角形やや二叉
160	1－Ⅱ	橙褐色		38	口唇を折り返しぎみ	180	1－Ⅱ	橙褐色		33	断面三角形やや二叉
161	4－Ⅱ	褐色		74	口唇下端部を肥厚	181	1－Ⅱ	橙褐色		39	突帯気味になる
162	4－Ⅱ	橙褐色		—	口唇下端部を肥厚	182	1－Ⅱ	褐色		13	断面三角形やや二叉
163	1－Ⅱ	橙褐色		—	口唇下端部を肥厚	183	3－Ⅱ	橙褐色		—	断面三角形やや二叉
164	1－Ⅱ	橙褐色		—	口唇下端部を肥厚	184	1－Ⅱ	橙褐色		29	断面三角形やや二叉
165	1－Ⅱ	褐色		53	口縁全体を肥厚	185	1－Ⅱ	橙褐色		61	突帯気味になる
166	1－Ⅱ	橙褐色		51	口縁全体を肥厚	186	1－Ⅱ	橙褐色		25	内湾
167	1－Ⅱ	橙褐色		40	摩耗が著しい	187	1－Ⅱ	橙褐色		1	内湾
168	1－Ⅱ	橙褐色		14	断面三角形	188	4－Ⅱ	橙褐色		—	内湾


113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
0
5cm

第29図　土　器　実　測　図　(1)


137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
169
170
171
172
0
5cm

第30図　土　器　実　測　図　(2)



第31図　土　器　実　測　図 (3)

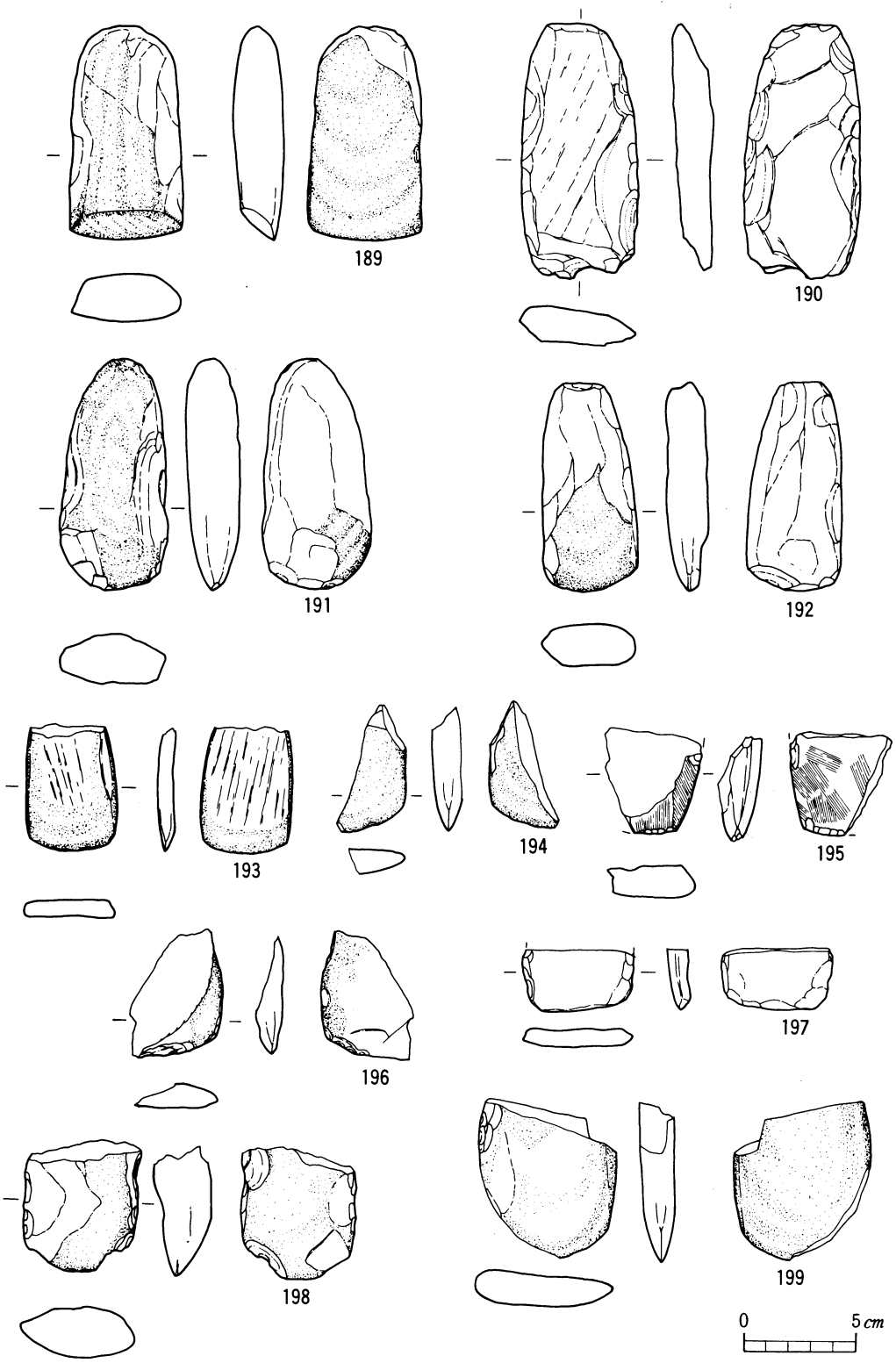
2　石　　器

石は表面採集品も含めると総数242点である。そのうち，人間の手が加わった石器は63点である。ここでは各トレンチから出土した石斧・凹石・剥片の16点を図示した。

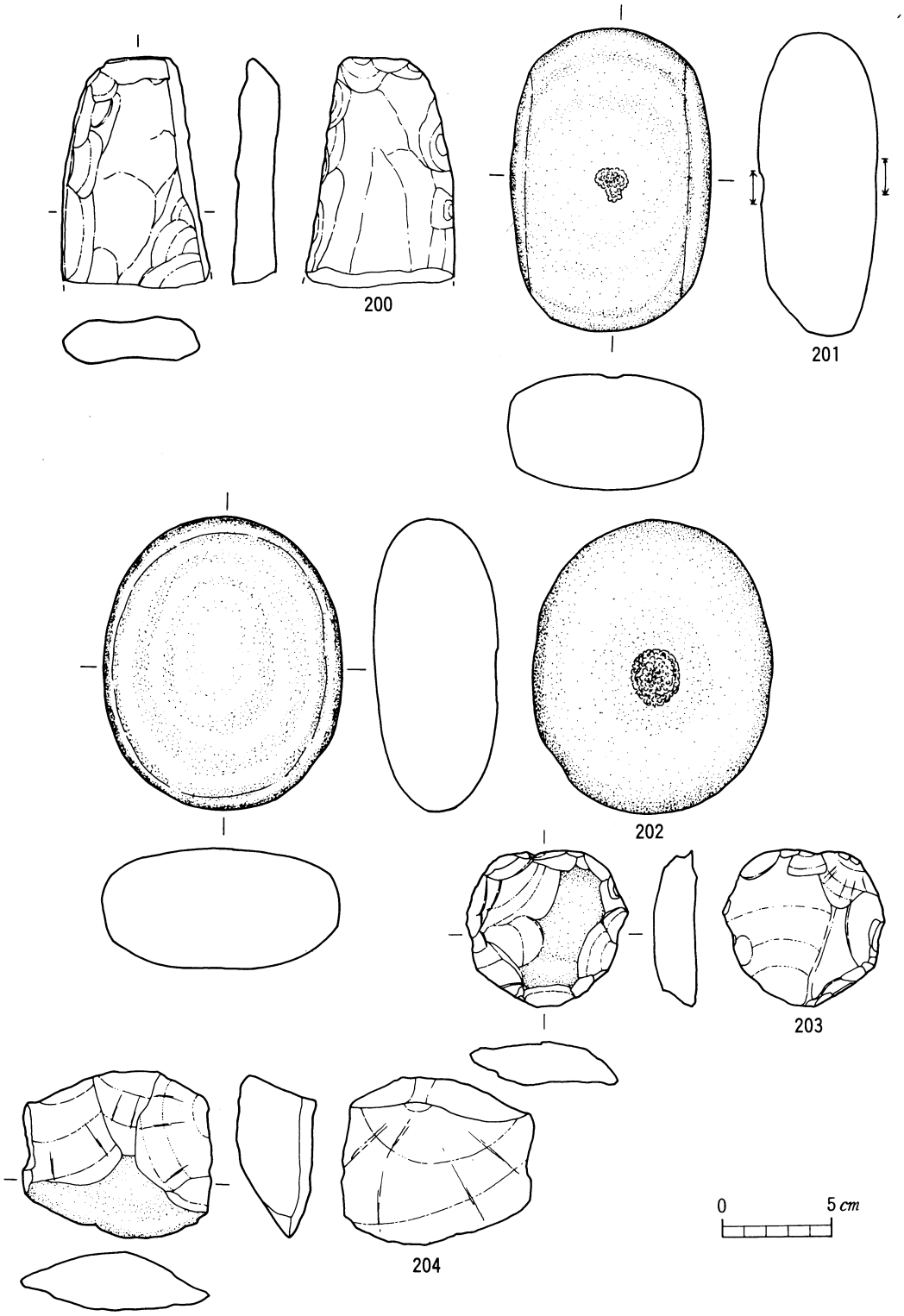
石斧は，石器全体の中で大半を占めている。打製のもの，打撃面を残しながら磨いて形を整えたもの，全面磨製のものの3通りがみられる。前2者が両刃であるのに対し，全面磨製のものは片刃である。

201，202は凹石である。両方とも曲面はきめ細かに磨かれている。中央の凹部は深くない。201が両面とも凹部をもつのに対し，202は片面のみである。

203，204は剥片である。203は母岩からとり出した剥片に両面から剥離を加え，円形に整えている。204は表皮を剥ぎとり，打面を調整した後，剥離したものである。なお，203・204の表皮面はきめ細かに磨かれているが，人工によるものか，自然によるものか判断できない。



第32図　石　器　実　測　図　(1)



第33図　石　器　実　測　図　(2)

第5表　石器観察表

No.	器種	トレンチ	層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	材　　質	遺物No.	備　　考
189	石斧	4	Ⅱ	9.75	5.1	2.3	191	堆積岩(凝灰岩質)	85	片刃・刃部を上にして垂直に出土
190	石斧	1	Ⅱ	11.65	5.0	1.85	178	砂岩	27	
191	石斧	4	Ⅰ	10.65	4.9	2.5	205	頁岩		
192	石斧	3	Ⅰ	9.5	4.2	1.8	134	砂岩		
193	石斧	3	Ⅰ	(5.65)	4.0	0.8	(39)	頁岩		
194	石斧	3	Ⅰ	(6.1)	(2.4)	(1.3)	(22)	砂岩		
195	石斧	1	Ⅰ	(4.6)	(4.5)	(1.5)	(45)	頁岩		
196	石斧	1	Ⅱ	(6.6)	(3.9)	(1.2)	(29)	砂岩	15	
197	石斧	1	Ⅰ	(2.7)	(5.0)	(0.9)	(23)	砂岩		
198	石斧	3	Ⅰ	(6.1)	(5.15)	(2.6)	(100)	頁岩		
199	石斧	4	Ⅰ	(6.7)	(6.2)	(1.5)	(100)	頁岩		
200	石斧	1	Ⅰ	(10.5)	(6.65)	1.9	(246)	砂岩		
201	凹石	4	Ⅱ	14.1	8.9	5.4	1100	花崗岩	82	
202	凹石	2	Ⅱ	13.6	10.8	5.5	1180	花崗岩	81	ピット内出土
203	剝片	3	Ⅰ	7.1	7.15	1.9	136	砂岩		
204	剝片	4	Ⅱ	7.9	8.6	3.2	232	砂岩	67	

第10節　ま と め

徳之島では，これまで海岸部の遺跡しか調査されていなかったが，内陸部の遺跡に初めて確認調査のメスを入れたことに，ナーデン当遺跡調査の意義がある。また，16㎡という狭い範囲の調査でありながら，多くの資料を得ることができた。

本遺跡の土器は，口縁部の特徴から宇宿上層式の範疇に含まれる。これまでの宇宿上層式土器は無文のものが多いが，本遺跡出土の土器は，頸部に文様を施すなど他の遺跡のものと大きな違いを示している。文様は列点の下に「X」を連ねて描かれているのが主流である。

宇宿上層式土器は，これまで弥生時代のものと考えられていたが，近年，九州本島の縄文晩期土器と宇宿上層式土器が共判している事例が増えていることなどから，縄文晩期までさかのぼる可能性が指摘されている。(註) しかしながら，宇宿上層式土器がいつまで使用されていたかという確かな証拠は現在のところ確認されていないところから，今後は，宇宿上層式土器を細分し，時期的位置づけをはっきりしていかなければならないと考える。

ナーデン当遺跡と類似した立地条件にある遺跡は，現在のところ伊仙町喜念上原遺跡が知られ，土器もよく似ている。海岸部遺跡との違いは，貝類を全く出土しないことである。また，発掘調査が行われている面縄貝塚，犬田布貝塚においては，磨石・凹石・敲石が石斧より量的に多いのに対し，ナーデン当遺跡では石斧の方が圧倒的に多数を占める。このことは立地条件の違いによって，主となる生業が異なっているためであると考える。

多くの資料を得ながらも，時期的な問題を始め，当時の生活の様子をありありと復元するには，まだ不明な点が多い。

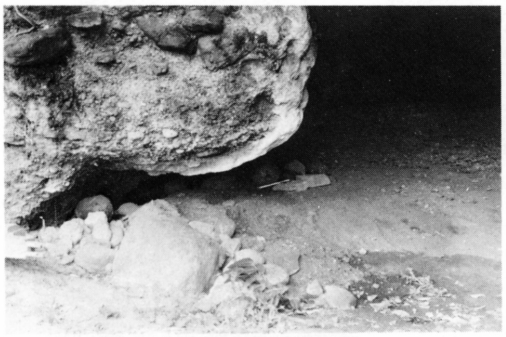
(註)『第2回鹿児島県考古学会，沖縄県考古学会合同研究会資料』 1988・10

図　　版

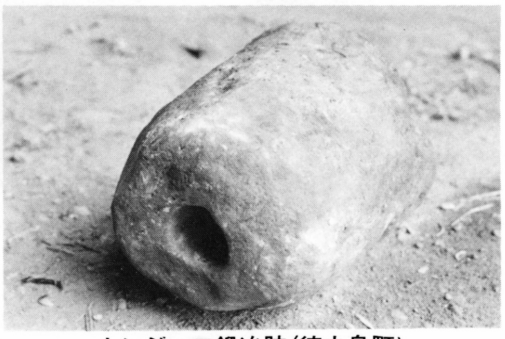
図版1

トビヤ遺跡(徳之島町)

トビヤ遺跡(徳之島町)

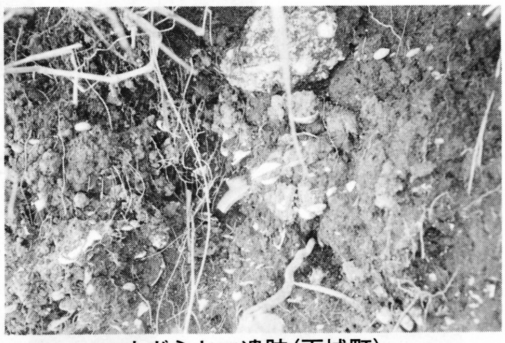


カンジャエ鍛冶跡(徳之島町)

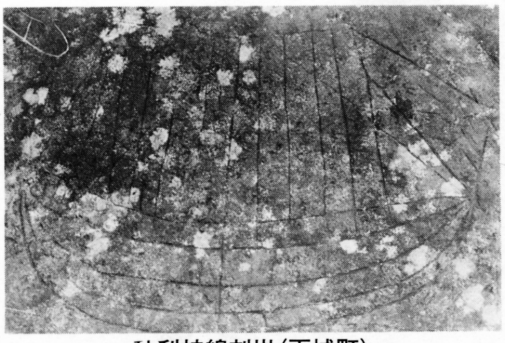


カンジャエ鍛冶跡(徳之島町)

平土野原遺跡(天城町)



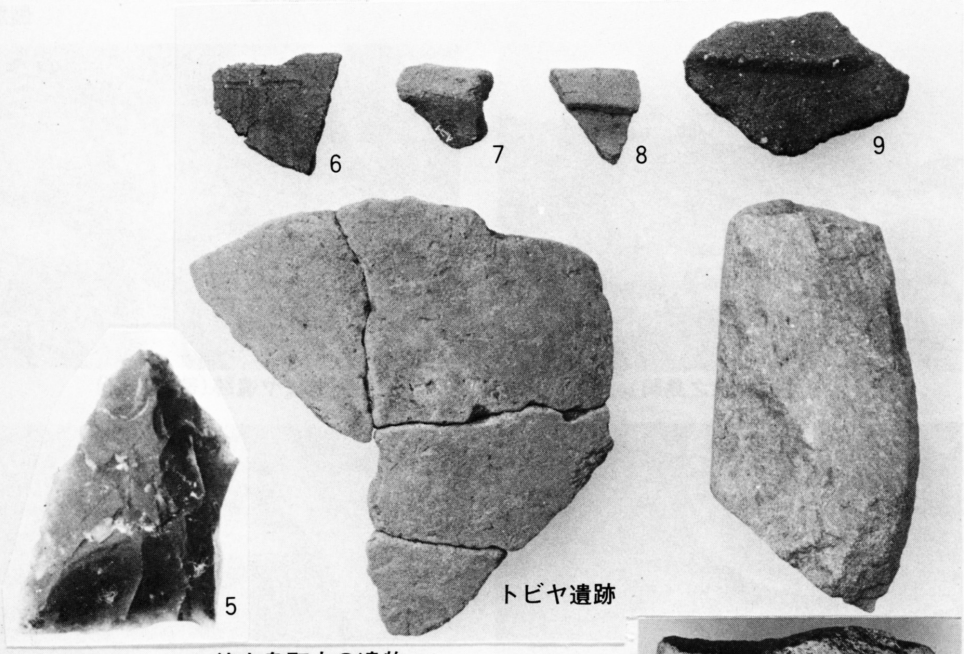
オガミヤマ遺跡(天城町)



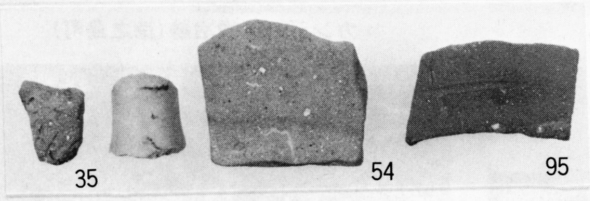
秋利神線刻岩(天城町)

アマングスク(伊仙町)

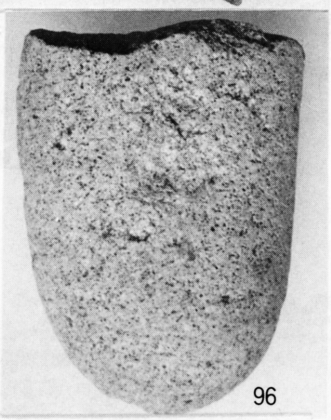
図版2

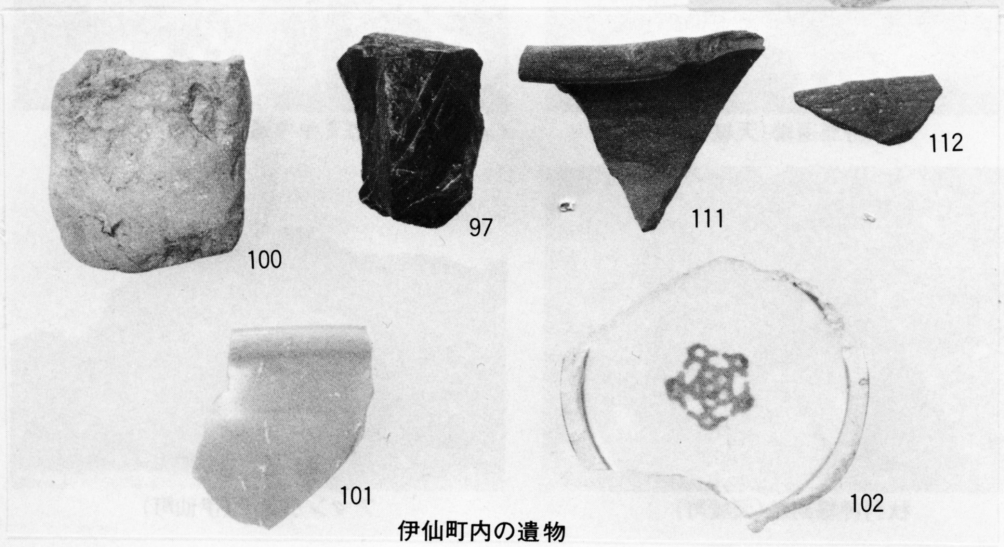


徳之島町内の遺物



天城町内の遺物

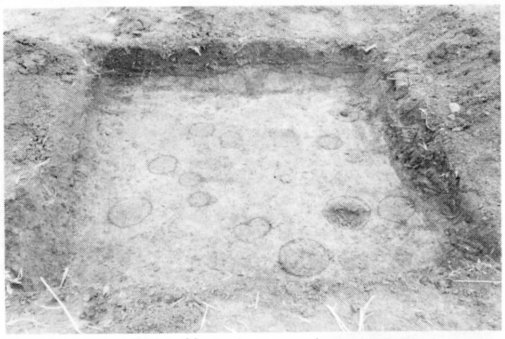




伊仙町内の遺物

ナーデン当遺跡

第1トレンチ



第1トレンチ

第1トレンチ

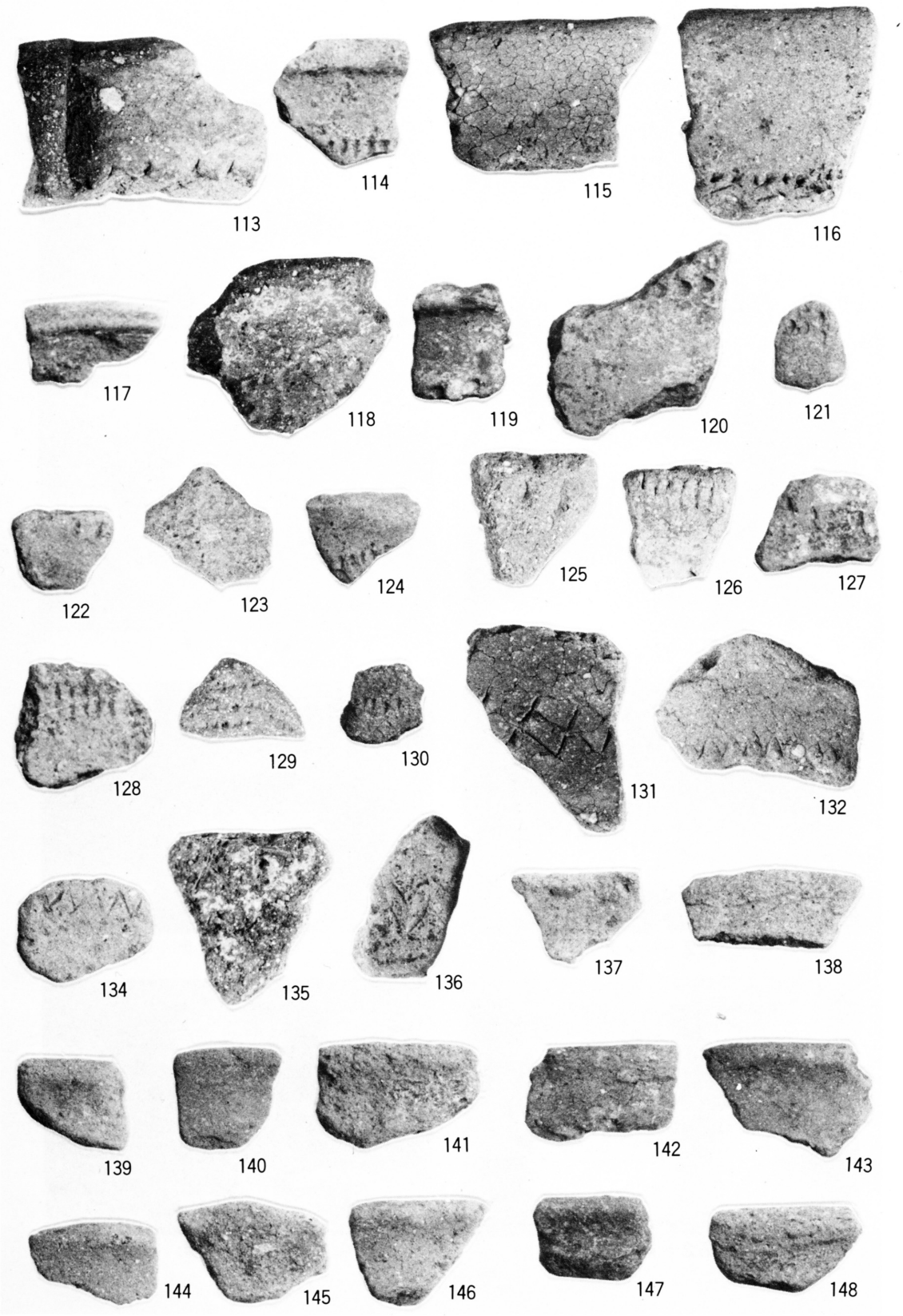
第2トレンチ

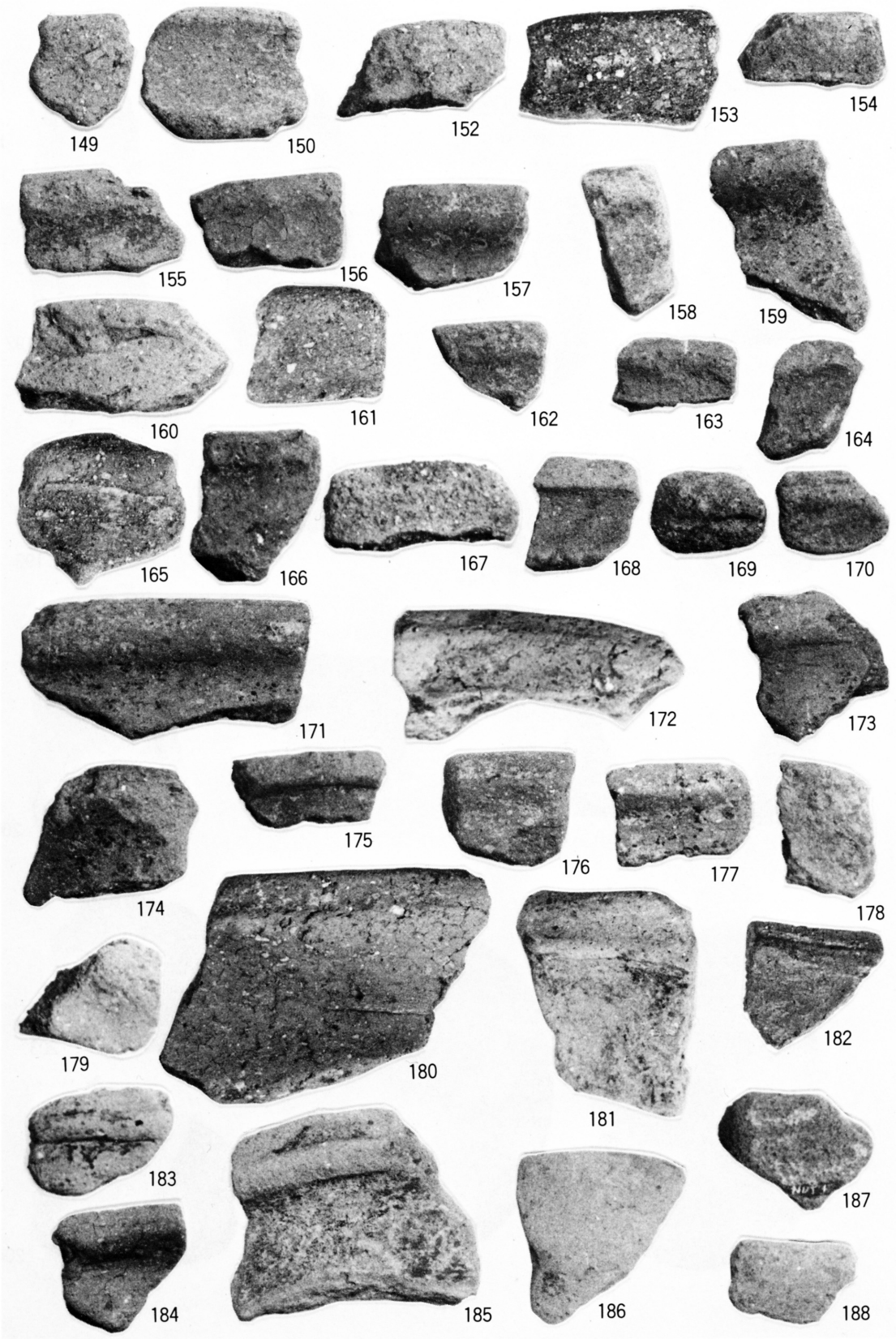
第2トレンチ

第2トレンチ

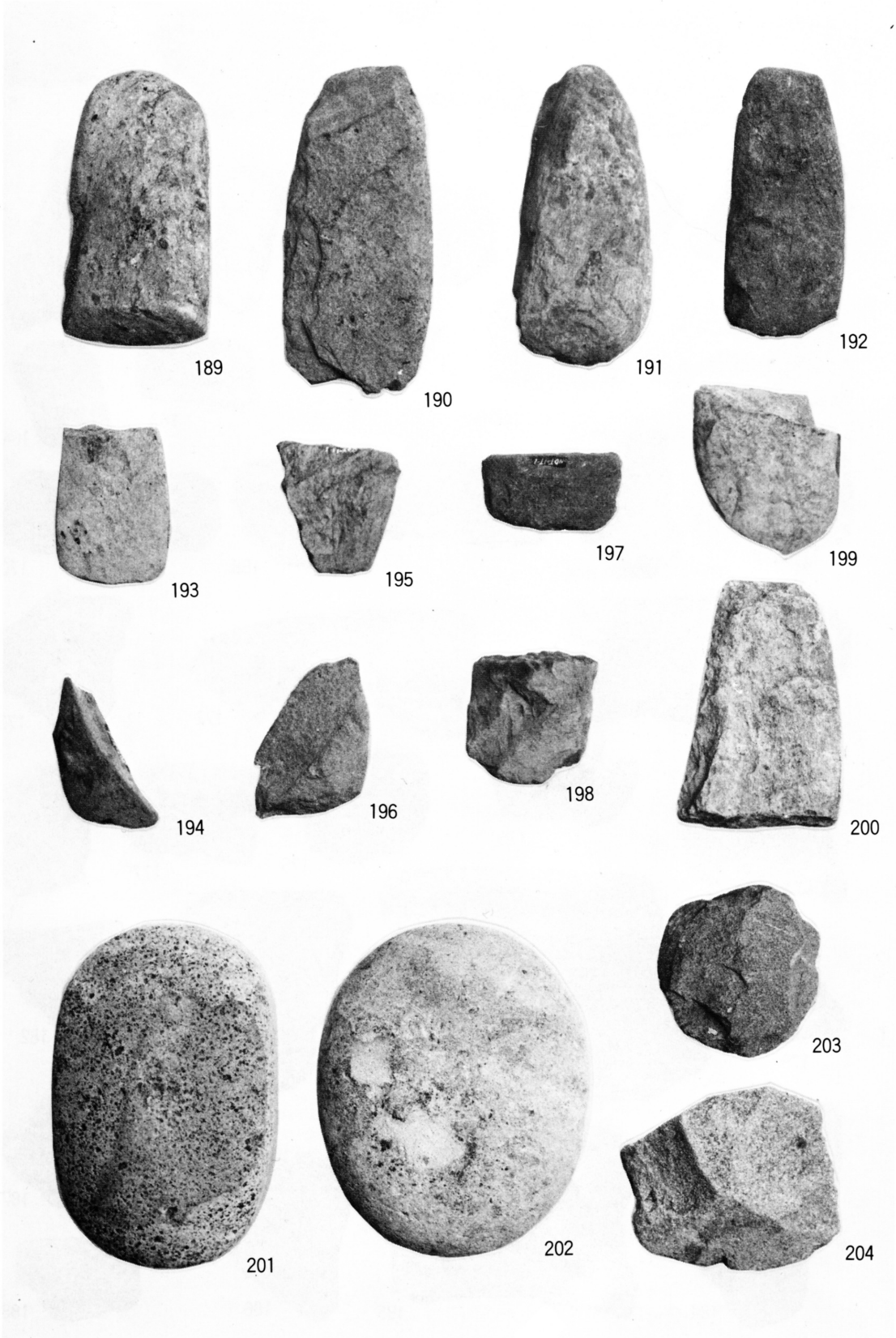
第4トレンチ

図版4


113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148


149
150
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188

図版6



あとがき

昭和62年度から奄美地区埋蔵文化財分布調査を開始することとなり，初年度は，徳之島を調査対象とし，昭和63年２月22日から３月10日まで分布調査・試掘確認調査を実施した。

分布調査は，そろそろハブが活動をはじめるから気をつけてという注意に，へっぴり腰でさとうきび畑や荒地を通り抜けて，さとうきびを植え付けたばかりの畑で表面採集をしたり，ブッシュをかきわけて洞穴・岩陰に行き先人の頭骨と出会ったりした。

その結果，昭和59年度作成の遺跡地名表に新たに徳之島町で13箇所，天城町で17箇所，伊仙町で５箇所の遺跡が付け加えられた。その中には地元の研究者や担当職員が確認していた遺跡も少なくない。

また，今回は表面調査だけでなく，内陸部にある数少ない遺跡として注目されているナーデン当遺跡（徳之島町）の確認調査も実施した。

今回の調査は約２週間であったが，これまで遺跡があまり確認されていなかった徳之島北部においても相当数の遺跡が確認された。

本事業を実施するにあたっては，徳之島三町の教育委員会には案内，管内地図等の提供，小字名の調査など多大な協力を得た。特に徳之島町では確認調査を実施したため，作業員の確保・調査地の土地所有者との交渉など骨折りだったことと思う。九州農政局徳之島開拓建設事業所には現地案内等の協力を得た。また，徳之島町の徳富重成氏，町田進氏，伊仙町の義憲和氏四本延宏氏には遺跡の案内等の協力を得た。まことに感謝する次第である。

最後に，さとうきび収穫期の忙しい中，発掘調査に従事していただいた地元の方々，文化課収蔵庫で整理作業に従事していただいた方々，多くの人の協力がありました。氏名を記して感謝の意を表したい。

発掘作業員

徳富　重成・山本スマ子
村上　ミツ・中村　リカ
乾　　吉江・宮上シゲ子

整理作業員

永野香代子・行船　順子